

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-29

EToS : 法政大学江戸東京研究センター年度 報告書, vol.5

(出版者 / Publisher)
法政大学江戸東京研究センター

(開始ページ / Start Page)
1

(終了ページ / End Page)
41

(発行年 / Year)
2022-03-31

法政大学

EToS

2021 vol.5

5

江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies



目次

マニフェスト	3
--------	---

5年間の総括と新・江戸東京研究の新たなステージへ	4
江戸東京研究センター長、法政大学デザイン工学部教授 高村雅彦	

5つの研究プロジェクト	6
-------------	---

① 水都—基層構造	6
-----------	---

② 江戸東京の「ユニークさ」	8
----------------	---

③ テクノロジーとアート	10
--------------	----

④ 都市東京の近未来	12
------------	----

⑤ 江戸東京アトラス	14
------------	----

2021年度事業報告

特別展	16
「人・場所・物語——“Intangible”なもので継承する江戸東京のアイデンティティ」	

総括シンポジウム	18
「EToSがつくる新・江戸東京研究の世界」	

シンポジウム・研究会	
研究会「東京写真の新たな可能性」	23
シンポジウム「 commons を再生する東京」	24
研究会「東京と今和次郎—『動き』としての惑星都市論—」	25
シンポジウム「都市の表象文化—アニメ・特撮における東京」	26
シンポジウム「玉川をめぐる名水と歴史と景観～『中世武蔵国絵図』の読み解き～」	27
「江戸東京アトラスワークショップ」	28
シンポジウム「落語がつくる『江戸東京』イメージ」	29
東アジア近世・近代都市空間のなかの女性	30
シンポジウム「異域から国土へ」	32
「江戸東京研究センター2020年度報告会」	32

学内外・地域活動	
第12回外濠市民塾オンラインレクチャー	33
第13回外濠市民塾オンラインレクチャー	33
第14回外濠市民塾オンラインレクチャー	34
講義「東京MAP」の作成／プロジェクト「東京発掘プロジェクト水辺編」／	
講義「フィールドワーク」／講義「都市史」	35

著書・論文・その他	36
-----------	----

メンバー	44
------	----

表紙図版の出典（上から）：

■「天保江戸大地図（1843年）」国立国会図書館

■「国土地理院航空写真（2017年）」国土地理院

■この地図は、（一財）日本地図センターが刊行した「参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京測量原図」のうち「新宿区市ヶ谷付近」を使用しました。

■「ソリッド・ボイド・マップ（2018年）」法政大学北山研究室製作

持続可能な地球社会の実現に向け、
近代のパラダイムを超えた
都市の未来を考えるために、
私たちは、新・江戸東京研究に挑戦します。

As we head towards the reality of
sustainable global communities,
we rise to the challenge of New Edo-Tokyo Studies
in considering the future of the city free
from the modern-era paradigm.

江戸東京研究センターは、江戸東京に蓄積され現在にも生きる固有の自然・歴史・文化・人的資源の発掘と再評価を通じて、この都市が文化的・空間的に持続している理由を解明し、そこから持続可能な地球社会を構築するための方法と理論とを導き出し、その知見を地球社会の諸課題を解決する〈実践知〉として育み広める教育研究拠点です。

The Research Center for Edo-Tokyo Studies unearths and reevaluates the nature, history, culture and human resources that have accumulated in Edo-Tokyo and live on today, and in so doing clarifies the reasons why the city has endured culturally and spatially, and derives from them a method and theory for constructing sustainable global communities. It is a learning research base where that wisdom is nurtured and widened into a “practical wisdom” for solving the various issues of global communities.

江戸東京研究センター長、法政大学デザイン工学部教授

高村雅彦

本事業の目的は、地球社会の課題解決に向けた知の創出と自立的な市民の育成によって世界の持続可能性に貢献することを謳う〈法政大学憲章〉に則り、持続可能な社会（都市）のあり方を、江戸東京モデルに、学際的な研究体制のもとで国際的な視座・視点も加えながら探究することである。循環型都市、持続可能な発展を実現してきた都市として世界的に再評価される江戸東京は、地球環境問題、産業構造の変化、グローバリゼーションの浸透に抗する地域の自立、成熟社会における質の高い個性豊かな社会の発展などへの対応が世界的に強く求められている現代において、様々な課題解決の可能性を持つ重要な研究対象となりうる。

本学には江戸東京に関する幅広い領域からの膨大な研究蓄積がある。エコ地域デザイン研究センターは、国際比較の視点からこの都市の特質を研究し、「水都」としての側面や、エコロジカルな都市としての側面について学際的な研究を積み上げてきた。田中優子総長も所属する国際日本学研究所は、国際的共同研究の積み重ねにより外からの眼差しで江戸を含む日本文化の新しい分析を可能にしてきた。この理系と文系という、相互に性格を異にする二つの研究機関が共同してより学際性を高め、大学をあげて本事業を推進する。

上の文章は、いまから5年前の文部科学省「平成29年度私立大学研究ブランディング事業計画書」の申請に記した事業目的です。その的確で広範な視野と充実した内容の奥深さは、いまなお薄らぐことなく新鮮で改めて身が引き締まります。思えば、このブランディング事業に採択されてすぐに文部科学省の事情で事業の中止が決定されましたが、幸いその後も大学の支援を得ることができ、こうしてさまざまな環境が変化しつつも、EToSに関わるすべての研究者が一貫して江戸東京研究を精力的に継続し多くの成果を蓄積してきたことは、法政大学にとって確実に一つの歴史を作り上げたと言っていでしょう。

当初計画の一つの区切りであるこの5年間にあって、2021年8月末時点でシンポジウム・研究会89回、うち国際シンポジウム13回、延べ参加人数8,630人、書籍・報告書の刊行49編、論文・学会発表126件を数えます。そして、とくに2021年9月に2週連続で開催したシンポジウム「EToSがつくる新・江戸東京研究の世界」では、これまでの成果の上に立った今後の展開を目指して「都市をつくるのは誰か一定住者と流入者・来訪者、それぞれの役割とまなざし」、「都市の表象文化『名所』から『聖地』へ」、「コモンズを再生する東

京2021」の3つのセッションに続き、最後に「江戸東京研究の可能性をさぐる」と題して、田中優子、陣内秀信の両氏による対談をおこない、EToS独自の希望の持てる射程を定めることができ実に刺激的な内容となりました。また、同時に開催したHOSEIミュージアム特別展「〈人・場所・物語〉——“Intangible”なもので継承する江戸東京のアイデンティティ」では、古代から現代までをパースペクティブに見据えながら、幾度にもわたる都市と社会の変貌を経験してきた江戸東京にあって、それでも変わらない地形や自然、記憶、物語といったものを、いわゆるモニュメントなどではなく見えないもの、つまり“Intangible”な遺産であると位置づけ、これまでの研究成果を踏まえて展示しました。1か月足らずの期間中に来場者数は652名を数え、ミュージアム開設以来最大となり、学内外から高い評価をいただきました。

さて、われわれはすでに次の新たなステージ向かうための準備にとりかかっています。年度当初から新・江戸東京研究の理論化を目指して、1980年代のいわゆる〈江戸東京学〉からとり残された課題は何か、その枠組みを超え、より深く大きく江戸東京の特質を解明するための対象や方法はいかなるものかを探り、文理融合にありがちな多様な研究テーマや学

問分野を細分化したままにはせず、いかに統合し理論化するかを議論してきました。その結果、①二項対立ではない有機的なつながりとしての都市と田園の関係、②それに対する文化的景観の有効性、③モニュメントではない名所という概念・カテゴリーの組み立て、④歴史・文化的アイデンティティの実態と継承の方法、⑤バーチャルとリアリズムによる表現の自由、⑥地形などの自然条件と古代中世という都市の基層への着目、⑦場所・空間・環境を一体にとらえる考え方、⑧人間と社会が作り出す様々な都市とスケールの関係の把握と効果の8つが重要なテーマとして浮かび上がり、それらを統合して今後の可能性を求めて開催したのが2021年9月のシンポジウムと特別展でした。

現代の東京を考えるために歴史的に江戸との連続性を視野に入れる。それはいまの東京が抛ってたつ基盤を見さだめ、過去から現代につながるものを探り、この都市のアイデンティティとは何かを認識することでより深く正しい理解を得ようとすることを意味します。単なる歴史だけでなく、これからの東京、そして日本の価値観の転換と行く先を考える視点を見定め、これまで以上に精力的な研究を継続していきます。今後とも学内外からのご支援、ご助言を心からお願い申し上げます。



高村雅彦

1964年北海道生まれ。法政大学大学院博士課程修了。2008年より法政大学デザイン工学部建築学科教授。専門はアジア都市史・建築史。1999年前田工学賞、2000年建築史学会賞を受賞。2013年上海同济大学客員教授。主な編著書に『水都学Ⅰ～Ⅴ』（法政大学出版局、2013年～2016年）、『タイの水辺都市—天使の都を中心に—』（法政大学出版局、2011年）、『中国江南の都市とくらし 水のまちの環境形成』（山川出版社、2000年）などがある。

1

Project 1 水都一基層構造

江戸東京の水辺を復元する

法政大学デザイン工学部教授、プロジェクトリーダー 高村雅彦

本プロジェクトは、江戸東京が長く生き続けるその理由と意味を解き明かすために、これまであまり注目されてこなかった古代・中世から綿々とつながる大地や自然と結びついた都市と地域の基層構造の解明を水との関係に着目し追求しています。

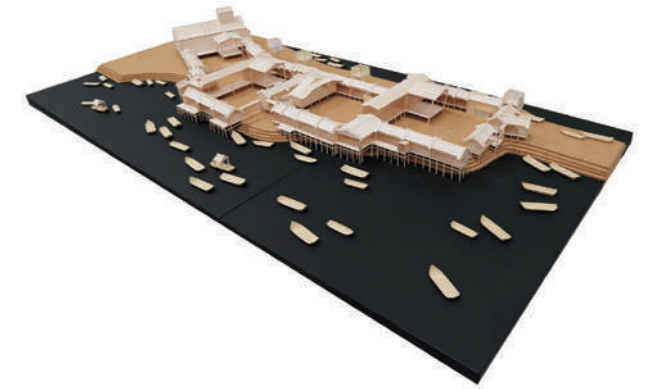
2021年度は、前年度から引き続き水都の基層構造の研究を深めるために、都市と地域の領域、いわゆるテリトリーと文化的景観に焦点をあてて研究を進めました。江戸東京のいわゆる中心部だけではなく、対象の範囲をより広くとらえ、江戸東京の全体を水と地域形成の視点から再読することを目指しています。とくに、2020年度に発行した「中世武蔵国絵図」は、江戸以前の中世の時代に注目し、水系と道に着目しながら自然を基層とする構造と歴史を重ねて読み解くエコヒストリーの手法を用いて武蔵国を中心に関八州を描いた絵図で、学内外で高い評価を得ました。そこで、作成者の神谷博氏(当センター客員研究員)を中心に、8月にシンポジウム「玉川をめぐる名水と歴史と景観 ～『中世武蔵国絵図』の読み解き～」を開催し、江戸東京の西側に位置する郊外の水の意味を中世からとらえなおす意欲的な会となりました。また、別の組織との共同研究を活発に行いました。水都東

京・未来会議のリレーセミナーでは本センターの陣内秀信、皆川典久の両氏が講演し、エコ地域デザインセンターと共催で5月、7月、10月に外濠市民塾オンラインレクチャーを開催し、神田川に一万艘の小舟を浮かべる東京ピエンナーレの天馬船プロジェクトにも参加しました。

そして、HOSEIミュージアム特別展・江戸東京研究センター「く・場所・物語」——“Intangible”なもので継承する江戸東京のアイデンティティ(2021年9月7日～10月3日)では、報告書や建築図面、建築模型、所蔵史料を展示して、従来から蓄積してきた水都研究の成果を披露させていただきました。会場のSite Aでは古代から現代を貫く「水都」としての江戸東京を、同じくSite Bでは近世から近代に受け継がれた原風景としての水辺をテーマとしてそれぞれ設定しました。とりわけSite Aでは、1630年～1650年代の江戸初期を描いた「江戸名所図屏風」(出光美術館蔵)を読み解き、木挽町芝居町の部分(現在の中央区銀座歌舞伎座付近)について復元図面と模型を作成し展示しました。この屏風絵などの分析から芝居町の場所が木挽町五・六丁目であることを突き止めた報告書も同時に展示し、東を江戸湊、西を三十間堀川に囲まれ、まさに水に浮く芝居町独特の祝祭

的な華やぎをもった雰囲気をもった三次元で表現しました。その隣には、かつて江戸城内に存在した本丸奥舞台と二の丸御殿水舞台、加えて弘化5(1848)年に宝生大夫友子の一世代勸進能として神田筋違大橋外に仮設された神田川沿いの仮設の能舞台について、法政大学能楽研究所協力のもと「弘化勸進能絵巻」及び「江戸城本丸舞台之図」(いずれも法政大学鴻山文庫蔵)をパネル化し、それらを復元した建築模型とコンピュータグラフィックを展示しました。Site Aの入口には、学生が製作した江戸時代の蕎麦屋の屋台を置いて、それを本棚として利用し、そこにこれら水辺に開く江戸の能舞台をまとめた報告書「復元 江戸城能舞台と弘化勸進能」を展示しました。さらに、エコ地域デザイン研究センターの提供により、江戸東京の古代・中世から続く水を中心とする地形や自然といった基層に光を当ててその原風景を復元しながら、次の近世・近代にそれと結びつく人文的な文化がその上に形成されたことを見て、それらがのちの都市と地域のコンテキストや仕組みのベースをなして人々の営みが展開するといった一連の関係性に着目し編集したビデオ「水の都市・東京」を放映しました。

最後に、EToSとカ・フォスカーリ大学の共催で2020年1月



SHIMADA Yusuke / apgm*
「江戸名所図屏風」木挽町芝居町部分復元模型(2021年度デザイン工学部建築学科3年生授業「フィールドワーク」作品)

にヴェネツィアで開催されたシンポジウム「水都としての東京とヴェネツィア 過去の記憶と未来への展望」の内容が、イタリアの都市史学術誌である『STORIA URBANA』(英語版)の特集として2021年末に刊行され、続けてその日本語版が2021年度末に『EToS叢書3 水都としての東京とヴェネツィア 過去の記憶と未来への展望(仮)』が法政大学出版会から発行される予定です。

いずれの成果にも、現代の東京を考えるために、歴史的に古代を基盤とする江戸との連続性を視野に入れることでその価値を掘り起こし、東京の都市と人々に水辺を取り戻したいというわれわれの気持ちが込められています。



高村雅彦

1964年北海道生まれ。法政大学大学院博士課程修了。2008年より法政大学デザイン工学部建築学科教授。専門はアジア都市史・建築史。1999年前田工学賞、2000年建築史学会賞を受賞。2013年上海同济大学客員教授。主な編著書に『水都学Ⅰ～Ⅴ』(法政大学出版局、2013年～2016年)、『タイの水辺都市 一天使の都を中心に』(法政大学出版局、2011年)、『中国江南の都市とくらし 水のまちの環境形成』(山川出版社、2000年)などがある。

2

Project 2

江戸東京の「ユニークさ」

表象がかたちづくる江戸東京

法政大学文学部教授、プロジェクトリーダー 小林ふみ子

本プロジェクトでは、今年度、(1)シンポジウム「落語がつくる〈江戸東京〉イメージ」(11月23日)、(2)シンポジウム「東アジア近世・近代都市空間のなかの女性」(22年2月28日)を実施、いずれもセンターのメンバーおよび客員研究員だけでなく、広くテーマに即したスピーカーを迎えて実施した。また、学生たちを巻き込んだプロジェクトとして(3)江戸東京文化情報地図作成を開始した。

まず(1)シンポジウム「落語がつくる〈江戸東京〉イメージ」では、落語のなかで江戸時代のこととして語られながらも、実際には多分に近代以降に作りあげられた、現実とは異なる像によってこの都市が物語化されていることに注目した。

第一部は地理編で「動く江戸東京落語」と題し、田中敦・川添裕両氏に登壇いただいた。落語のなかでは、地名が「要石」となって咄(はなし)にリアリティをもたせる重要な役割を果たし、そこに出てくる地名は限定的で、その地を具体的に知る人だけでなくあまり馴染みのない人にとっても、想像の共同体ならぬ想像の共同空間としての落語国がかたち作られている。このことを前提に、咄が東西交流するなかで、生物のように多様に展開し、外来種がそれぞれの地で地名をたくみに置きかえながら適応しながら発展してきていること、また

生と死が交錯する咄のなかでは登場人物が地名をたどって都市空間を縦横にかけめぐるさまが描出されることが論じられた。落語国の江戸東京では、つねに動き続けるなかで生命力を増幅し、聴衆を咄とともに動かす活力に満ちていることが了解される討論であった。

第二部では、本センターの他プロジェクトにおいて公共性(アート・テクノロジー)やcommons(近未来)がキーワードになるなかで、それらと交差させるよう「落語の中の長屋空間」とした。落語に多い長屋を舞台とする咄は江戸時代以来の長屋生活を反映したものではあるが、実はジャンルとしての成立は明治・大正以降のことでそこには近代の長屋イメージの投影が多分にあったこと、実在した長屋は貧しいものとも限らず、長屋咄に語られるような職人連中や大家に混じって、隠居やお妾さん、芸事の師匠が集住すること自体、近代が江戸に抱いたファンタジーであることが指摘された。また、近代に作られた咄のなかには困難をかかえた住人を周囲が助ける「孝行糖」などもあるが、そのような長屋に託された社会的包摂の物語が後世になってノスタルジーとともに作られたことは、落語的人間関係の濃さへの憧憬の反映と考えられる。近世日本社会の構成単位となった「家」とは別の人間関係を物語化し、経済的な尺度によらない幸福のあり方を描くも

のとして、長屋咄は、今後の日本に必要となる、新しい集住のありかたや働き方に多くの示唆を与えてくれることが議論された。

江戸東京のアイデンティティが、遺構やモニュメントではなく、記憶・記録、また慣習や伝承など、インタンジブルなもので支えられてきたことを考えると、落語はそのなかで大きな役割を果たしてきたといえよう。歴史的に断絶に近い時代のあった上方落語に較べ、江戸東京では落語が江戸時代後期より連続と発達してきたこと、またその歴史的な影響力の大きさからしても落語がこの都市ならではのものとしてそのアイデンティティを担保する重要な役割を果たしてきたことは間違いないのではないか。その意味で江戸東京の「ユニークさ」を考察する重要な機会となった。発表や議論を公刊すべく、準備を進めている。

(2)シンポジウム「東アジア近世・近代都市空間のなかの女性」は、I 身分・規範と都市、II 都市の可能性、III 女性が描く近代都市の三部構成とし、近世から近代にかけての東アジア都市における女性の体験を語る文芸から何が見えてくるかについて比較研究する。日本・中国・朝鮮・台湾の都市において、芸娼妓も含めたさまざまな社会的様態にある女性たち自身が何を語り、またそうした女性をどのように叙述したの

か。あえて、国別に語ることなく、状況やテーマに即して対置することで共通点を浮かびあがらせることにねらいがある。そこから見えてきたことについては、当該シンポ報告ページをご覧いただきたい。この成果は、昨年度、実施したシンポジウム「漢陽と江戸東京 それぞれの暮らし」と併せ、刊行することを計画している。

(3)江戸東京文化情報地図作成では、アトラスプロジェクトと関わりつつ、「ユニークさ」を明らかにするために、江戸時代および明治の地誌・案内記に見える江戸東京の食に関わる店舗の所在・分布を地図上に可視化する作業を開始した。すでに他大学・機関で名物などの分布に関する研究が行われている状況をふまえ、それらと重なることなく、かつ住民や商業地の変化もふまえて近世から近代への変遷が見えやすいテーマとして対象を設定したもので、未翻刻資料も含めて扱うことにしている。出版物に現れたという限定はつくものの、江戸から明治への移行期の消費生活、その変化が見出せるものと考えている。

本プロジェクトでは、さらに本年度初めに寄贈を受けた昭和初期前後の吉原の聞き書き資料の分析を近世・近代吉原の研究者に依頼し、進行いただいている。年度末または来年度早々のその成果の報告と研究会をもつことを計画している。



小林ふみ子

1973年山梨県生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士(文学)。2004年法政大学着任、2014年より文学部教授。専門は日本近世文学、浮世絵。2004年第29回日本古典文学会賞を受賞。主著に『天明狂歌研究』(汲古書院、2009年)、『大田南畝江戸に狂歌の花咲かす』(岩波書店、2014年)、『へんちくりん江戸挿絵本』(集英社インターナショナル、2019年)、近年の論文に「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号(2020年)などがある。

3

Project 3
テクノロジーとアート

都市の表象文化、その新たな可能性

法政大学国際文化学部教授、プロジェクトリーダー 岡村民夫

2019年度から「テクノロジーとアート」プロジェクトリーダーをされていた山本真鳥氏が名誉教授になった関係から、岡村民夫(表象文化論)に交代した。そして前年度からのチーム内の議論や江戸東京研究センター(EToS)運営委員会の議論を踏まえ、「東京」の表象に焦点を当て、特に現在進行形の変化や若い感性にかかわるアクチュアルな研究活動につとめた。

まず、2021年1月23日に開催され、前号で報告することができなかった研究会「東京写真の新たな可能性」について報告しておく。発表者の東京都現代美術館学芸員・丹羽晴美氏は、東京都写真美術館の学芸員を2018年度まで約30年つとめており、これまでに数々の写真展を組織してきた。そこで「東京」を重要なモチーフにした写真家の中から郡山総一郎、西野壮平、鈴木のぞみ、春木麻衣子という「いまのりにのった」四人の作風や現代的な意義を紹介していただいた。それぞれ独自の作風を持っているが、従来の東京写真において主流だったストリート・スナップ写真と異なり、厳密な方法論に従って制作しながら都市と人との関係や都市生活に潜在するものを可視化しようとしているという大きな共通性が見られる。司会者は岩佐明彦(法政大学デザイン工学部

教授、都市企画・建築計画)、コメンテーターは岡村が務めた。

2021年度の第一回の催しとして、7月17日にシンポジウム「都市の表象文化 アニメ・特撮における東京」を開催した。現在、実写劇映画において東京都心部でのロケ撮影が著しく希薄化している一方、もともと記録性を備えていなかったアニメにおいてロケハンに基づいて都心と郊外を精緻に表現した映画が増えており(『時をかける少女』、『バケモノの子』、『君の名は。』、『天気の子』等)、それが若者の「聖地巡礼」を促進している。このシンポジウムは、こうした状況がはらむ問題や積極的意義、70年代に遡る経緯、CGや制作過程のデジタル化による今後のアニメおよび映画の展開について考えてみようという企図による。

上記のような問題設定やパースペクティブを提示した基調講演「都市の表象文化 アニメ・特撮における東京」と、司会は岡村が担った。そして、萩原朔太郎の専門家で特撮映画についての論考も執筆している安智史(愛知大学短期大学部教授)が「特撮映画の東京 1950～1960年代 東宝SF映画を中心に」を講演し、高名な民俗学者で、『ゴジラとナウシカ——海の彼方より訪れしものたち』や『ナウシカ考 風

の谷の黙示録』の著者でもある赤坂憲雄(学習院大学文学部教授)が「ジブリアニメの武蔵野」を講演した。前者は、往年の東宝特撮映画における東京都心と武蔵野の表象の特徴を浮かびあがらせ、そうした特撮映画と1980年代の宮崎駿や押井守のアニメとのつながりや、庵野秀明・樋口真嗣『シン・ゴジラ』(2016年)とのつながりを示唆するものだった。後者は、武蔵野に位置する小平市に育った講演者自身の経験と、武蔵野および多摩丘陵に関する民俗学的知見に基づきながら、『となりのトトロ』から『借りぐらしのアリエッティ』にいたるジブリアニメを、東京西部の開発史に関するさまざまな見方として分析するものだった。コメンテーターは順に山本真鳥(江戸東京研究センター客員教授、文化人類学)、横山泰子(理工学部教授、日本文学・日本近世文化)、岩佐明彦が務めた。

もともとこれは昨年度内の開催をめざして準備を進めたシンポジウムだったが、アニメや劇映画の実作者、映画批評家との交渉がうまく進まず、今年度の開催となった。またオンライン・シンポジウムにおいて動画が引用しがたかったため、視聴者にわかりづらい部分もあったかと思われる。けれども、2019年度の「テクノロジーとアート」プロジェクトの研究会

「コンテンツツーリズムと東京」(本学大学院教授・増淵敏之)と連続性を持ちながら、本年度9月に催した総合シンポジウム「EToSがつくる新・江戸東京研究の世界」のSession 2「都市の表象文化「名所」から「聖地へ」へつなげることができた点や、現在EToSが重視している「武蔵野」を新鮮に論じることができた点、デジタル化が映画にもたらすものとして「テクノロジーとアート」の関わりに照明を当てることができた点は自己評価しておきたい。

なお次年度前半に開催する予定で、東京ピエンナーレ2020/2021参加作品「銭湯山車」(文京区建築家ユース+銭湯山車巡行部)をめぐる研究会の準備をしている最中である。



岡村民夫

1961年横浜生まれ。立教大学大学院文学研究科単位取得満期退学。法政大学国際文化学部教授。表象文化論、場所論。著書に『旅するニーチェ リゾートの哲学』(白水社、2004年)、『イーハトーブ温泉学』(みすず書房、2008年)、『柳田国男のスイス — 渡欧体験と一国民俗学』(森話社、2013年)、『立原道造 — 故郷を建てる詩人』(水声社、2018年)、『宮沢賢治論 心象の大地へ』(七月社、2020年)など。宮沢賢治学会イーハトーブセンター代表理事、四季派学会理事、表象文化論学会会員、日本エスプレント協会会員。

4

Project 4 都市東京の近未来

コモンズを再生する東京（町家・長屋の可能性を再考する）

法政大学デザイン工学部講師、プロジェクトリーダー 山道拓人

「都市東京の近未来」グループでは、昨年度3月のシンポジウムで言及された町屋・長屋と日本固有の空間的資源・タイポロジーにフォーカスし、今年度は研究活動を行ってきた。

コロナ以前からではあるが、古い町家や長屋などの空き家をリノベーションし、ワーケーション拠点にしたり、まち宿にしたり、二拠点居住をするようなプロジェクトが昨今、増えてきている。デジタル環境が整うことで、どこでも働けるようになりつつあるために、田舎からリモートで仕事をしたい、自分の判断で暮らすことと働くことの間隔を調整したい、という動機は世代を問わずに強まってきているように思える。

特にコロナ禍の中においては、そういった状況が半ば強制的に後押しされた。コモンスペースが充実している町屋・長屋的な作られ方をしている建築プロジェクトは、職住のバランスを調整することができるために、地域拠点施設としての可能性を持つビルディングタイプとして再注目され始めている。コロナ以降、そういった空間の様々な使い方が実験的になされている最中であるので、いまだまとまった調査・研究などはほとんど見られない状況である。そういった背景から我々は、今

期、主に二つの活動を行った。

まず一つ目は、昨年度までのプロジェクトリーダーである北山恒氏を中心とした活動に新しい知見を加え総括としてのEToS特別展に参加したこと。ここでは、東京に展開する町屋・長屋などの空間的資源・タイポロジーをテーマにした若手建築家のプロジェクトの図面やダイヤグラム（仕組みを示すドローイングなど）を軸に展示構成を行った。また、そういった仕組みを持つ建築が実際にどのような場を形成し運用されているかを、法政大学の学生にレポートしてもらった。また共同性が発露している状況を詳細に記録し、それらの写真も合わせて展示した。さらに、大学院の課題とも連携し、東京23区における長屋的な建築の一つとも言える商店街を都市のコモンスペースに見立て、その分布図を詳細に制作した。加えて、実在する商店街をフィールドに学生が考案した新しい建築案の展示も組み合わせた。研究者だけでなく、学生も交えることで次世代にも連なる議論を展開した。

またもう一つは、今期からの新しい研究メンバーを迎え、町屋・長屋的な建築の可能性について議論し、それを報告書

（ブックレット）としてアウトプットすることを目標に活動している。新メンバーとして、江戸に関するイメージを展開する観光地の研究者（香月歩氏/東京工業大学助教）、町家を対象としてプロジェクトの経験を持つ設計者（森中 康彰氏/一級建築士事務所 小坂森中建築 代表）、また意欲的な建築プロジェクトのファイナンスなどを構築する不動産コンサルタント（佐竹 雄太氏/創造系不動産株式会社マネージャー、建築家住宅手帖編集長）という複眼的なチームとなっている。例えば、町屋・長屋の建築は、重要伝統的建造物群保存地区などの指定を受け、構えは美しく保存されたとしても、中身や運用に関しては指針がないことも多く、耐震断熱性の低さによって空き家になっていたり、過疎化している、といったような状況にさらされていることがよくある。冒頭に述べたような社会状況がシフトする中で発見された人々のニーズと、上手に活用されていない空間的資源とを、うまく引き合わせた事例も見られるようになった今、それらを多面的に分析することで、実践的で汎用性の高い都市・建築論を構築しようとしている。

特に、現時点で以下の四点において議論している。

1. 職住近接の生活様式からみた町家的なタイポロジーの可

能性

2. 商店街的な路地型の地域空間と、交通インフラの再編
3. 宿場町を観光地として再活用するまちづくり開発手法
4. これらをマーケティングやファイナンスの観点で考察する

といったように、実際に町屋・長屋的なプロジェクトの実践論を描こうとしている。年度末のブックレット制作に向け作業に取り組んでいる。



山道拓人（さんどう・たくと）

1986年東京都生まれ。東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。ツバメアーキテクト代表取締役、法政大学デザイン工学部専任講師、住総研研究員。代表作に「下北線路街 BONUS TRACK」「ツルガソネ保育所・特養通り抜けプロジェクト」「天窓の町家一奈良井宿 重要伝統的建造物の改修」「NHK Media Design Studio」「パナソニックのデザインスタジオ FUTURE LIFE FACTORY」など。

5

Project 5 江戸東京アトラス

名所の変遷から江戸東京の基層を探る

法政大学デザイン工学部教授、プロジェクトリーダー 福井恒明

江戸東京アトラスプロジェクトはEToSの研究成果を地図としてわかりやすく表現し、研究成果の公開や情報共有プラットフォームとすることを旨とした活動である。「名所の変遷から江戸東京の基層を探る」をテーマとし、その成果をGIS(地理空間情報システム)を用いたデジタル地図上の表現として示すことをミッションとしている。近世から近代の江戸・東京の名所案内を題材に、その内容や挿し絵、浮世絵を地図上に落とし込むことで、江戸東京を構成する要素がどのようなもので、時代によってどのように変化してきたのかを分析し、表現することに取り組んでいる。

本プロジェクトは2019年度に「江戸東京のユニークさ」プロジェクトの一部として活動を開始し、2020年度から独立したプロジェクトとなった。プロジェクトの核心となる作業は、複数の文献や絵図などの資料を同時に参照しながら、異なる分野の研究者がそれぞれの知見を重ね合わせて議論を進めていくところにある。ウィズコロナでの作業は大変制約が大きかったが、作業経過をSLACK(オンラインチャットツール)で共有し、月1度のオンライン打ち合わせで意見交換をすることでなんとか作業を進めた。2021年10月には通算3回目となる研究ワークショップを対面で実施した。今年度、プロジェ

クトメンバー全員が顔を合わせたのはこの一度きりであった。

2021年度は前年度に引き続き、江戸期の名所研究として『名所江戸百景』の視対象分析にもとづく風景体験の分析を行い、明治大正期の名所研究として『新撰東京名所図会』『東京近郊名所図会』『大東京案内』に掲載された名所の種類や分布・表現方法に着目した名所イメージの検証に取り組んだ。

『名所江戸百景』全119点のうち構図上領域推定が可能な111点について、既往文献や旧版地図等を参照して視点と視対象範囲を確認し、地図表現としてまとめた。名所江戸百景の視点分布地図はよく目にするが、「どの方向をどこまで描かれているか」の推定はこれまでにないものである。この作業をもとに、江戸中心部・郊外部・周縁部の3領域について絵図に描かれた領域の特徴を分析し、郊外部では朱引・墨引の外側を眺める絵図が多いこと、それより外側の周縁部では、江戸湾を眺めるものを除くと比較的近距离の領域を描いた絵図が多いことなどが明らかとなった。これらを通じて名所江戸百景全体としてどのような風景体験が得られるのかの一端を解明した。

『新撰東京名所図会』『東京近郊名所図会』記載の名所全4052地点、『大東京案内』記載の名所全667地点の位置を特定してGIS上にプロットし、その分布や名所種別、掲載画像(写真・挿絵・図会)等に注目して分析を行った。例えば橋梁については明治期には中小規模を含めて多くの橋が名所として掲載されていたのに対し、大正期には日本橋や隅田川橋梁群が取り上げられる程度となり、近代化の中での関心の変化がみられた。また市電や郊外に向かう鉄道など近代的な交通機関の整備と取り上げられる名所との関係がみられた。銀行・会社・官庁・工場などのモダン東京名所の分布が特定の地域に偏っていること、江戸期の大名・旗本・御家人の屋敷跡地や寺社地のあとに多くの学校が分布していることなども明らかとなった。このように名所を地図上に展開してビジュアルに分析を行うことで、名所に現れる明治・大正期の東京の近代化の過程を詳細に把握することができた。次年度以降は個別の名所案内の分析を引き続き進めるとともに、江戸期の代表的名所案内である『江戸名所図会』を対象とした分析、江戸から明治大正までの変化検証に着手し、これらを地図として一覧できるようにデザインする作業を進める。また本プロジェクトの作業成果はそれぞれ興味深いもの

だが、その量が膨大であるため学会発表や学術論文投稿だけでは広く詳細を公開することができない。そのため地図を中心とする成果を書籍として出版することを目指して企画作業を開始した。次年度以降実現に向けて作業を進める予定である。

最後に、文学部地理学科・大学院人文科学研究科・デザイン工学部都市環境デザイン工学部・大学院デザイン工学研究科の学部生・大学院生の熱心な作業によって本プロジェクトを進めることができた。協力してくれた学生諸君に心から感謝する次第である。

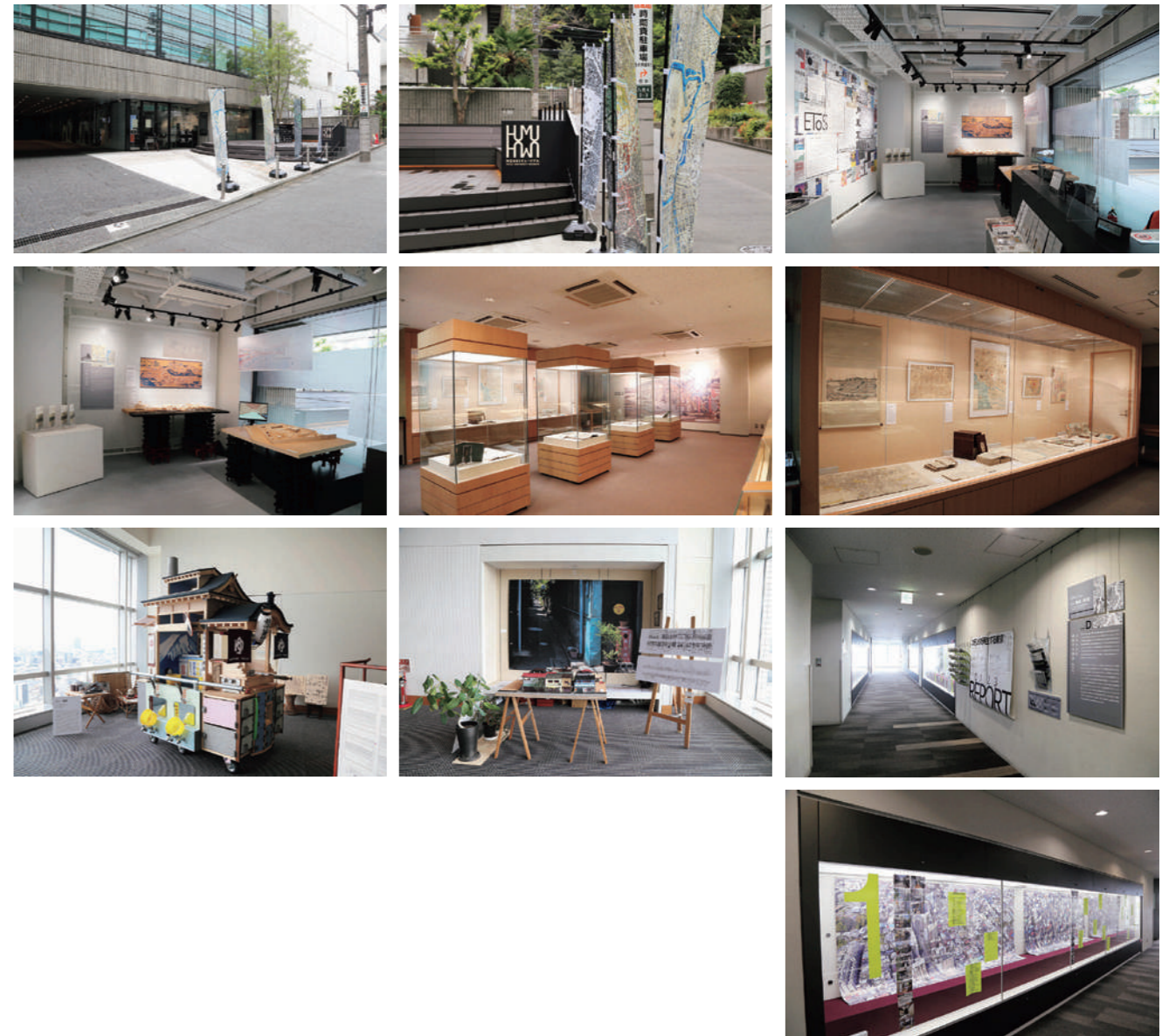


福井恒明

1970年東京都生まれ。東京大学工学部土木工学科卒、同大学院修士課程修了。清水建設、東京大学、国土交通省国土技術政策総合研究所などを経て2012年法政大学デザイン工学部准教授。2013年より同教授。専門は景観工学。編著書に『景観用語事典』、『コンパクト建築設計資料集[都市再生]』『水都学V』など。千代田区などの景観行政、葛飾柴又・四万十・佐渡の文化的景観に関わる。

特別展「人・場所・物語 — “Intangible” なもので継承する江戸東京のアイデンティティ」

会期: 2021年9月7日~10月3日



SHIMADA Yusuke / apgm*

展示テーマと会場

- Site_A「(水都)江戸東京」
会場: HOSEIミュージアム「ミュージアム・コア」
- Site_B「水辺の営み・都市の記憶と物語」
会場: 博物館展示室
- Site_C「現代の東京に息づく(江戸東京)」
会場: HOSEIミュージアム「ミュージアム・サテライト市ヶ谷(BT)」
- Site_D「 commonsを再生する東京 2021」
会場: HOSEIミュージアム「ミュージアム・サテライト市ヶ谷(外濠)」

現代の東京を考えるために歴史的に江戸との連続性を視野

に入れることの意味。それはいまの東京が拠って立つ基盤を見さだめ、過去から現代につながるものを探り、この都市のアイデンティティとは何かを認識することでより深く正しい理解を得ようとするのである。法政大学江戸東京研究センターでは、2017年度末の設立以来、文理の壁を越えて江戸東京とは何かというこの問題を追求してきた。この「壁」をごく簡単に説明するなら、都市環境や建築史といった理系の知の江戸東京へのアプローチが現代の課題解決につながるヒントを過去に求めるのに対し、歴史学、地理学、文学、文化研究のような文系は江戸東京のそれぞれの時代の事象そのものに迫ろうとするという点で大きく異なる。当センターは、こうした違いを乗り越え、相互に補完するように有機的に連携し、その知をいまに活かしていくための模索を続けている。

今回の展示では、そうした問題意識のもとに、古代から現代までをパースペクティブに見据えながら、幾度にもわたる都市と社会の変貌を経験してきた江戸東京にあって、それでも変わらない地形や自然、記憶、物語といったものを、いわゆるモノキュメントなどではなく見えないもの、つまり“Intangible”な遺産であると位置づけ、これまでの研究成果を展示した。Site_Aでは古代から現代を貫く(水都)としての江戸東京、Site_Bでは近世から近代に受け継がれた原風景としての水辺、Site_Cでは近現代に息づく江戸東京のアイデンティティ、Site_Dでは現代から近未来を見据えた人のつながる commonsとしての街づくりをテーマとした。期間中の来場者数は652名を数え、HOSEIミュージアム開設以来最大となった。(高村雅彦)



図録ダウンロードはこちらから。
https://edotokyo.hosei.ac.jp/application/files/1516/3150/5462/etos_catalogue.pdf



シンポジウム「EToSがつくる新・江戸東京研究の世界」

2021年9月19、26日 オンライン配信

HOSEIミュージアムにおける江戸東京研究センター特別展の開催に合わせ、9月19日と9月26日の二週にわたってシンポジウム「EToSがつくる新・江戸東京研究の世界」をオンラインで開催した。EToS独自の新たな江戸東京研究の可能性を所属する研究員ら全員で探った二日間は、実に刺激的で充実した内容となった。今回の特別展とシンポジウムを通して、単なる歴史だけでなく、これからの東京、そして日本の価値観の転換と行く先を考える視点が見えてきたのである。

(高村雅彦)

Session1

「都市をつくるのは誰か一定住者と流入者・来訪者、それぞれの役割とまなざし」

都市を語るとき、その主役として念頭に置かれるのはそこにずっと住みつづけている人々であろう。しかし、都市をつくるのは定住者ばかりではない。仕事や学びのために外からやってきてそのまま住むようになった人々、年単位あるいは月単位で滞在する人々、さらに短期的に滞在する人々。そうした外からやってきた人の存在、その文化的・経済的貢献があって、それが定住民の営為と交差し、複合するところに都市はつくられる。外から多くの人々、そこに付随する文化・情報・資財を集めているところに都市の都市たるゆえんがあり、それが最大の魅力でもある。

セッション1では、この点に着目し、江戸時代はじめから現代に至るまでの江戸東京の約400年の歴史における流入者・来訪者のありよう、かれらに向けられたまなざし、またその影響や貢献について、文化史・文学・歴史学・建築史・都市研究とさまざまな角度から語るという野心的な試みであった。

導入として小林が江戸の文芸がすでにその繁華は諸国から集まる人と物のうえにあること、そこには光だけでなく影の面もあることが描出されていたことを紹介した。続いて川添裕氏は江戸における流入者・来訪者の諸相とそこから生まれたさまざまな文芸などの作品を示したうえで、盛り場などにおいて文化的・経済的に大きな貢献があったことを論じた。続いて、根崎光男氏は来訪者がいるからこそ必要とされて設置された共同便所が、尿尿の販売によってあらたな利益を生む事業として注目され、いわば表舞台に出てくる過程を提示した。さらに高村雅彦氏は、明治期に活躍した代表的な建築家たちのほとんどが外から東京にやってきて学んだ人物たちであり、明治の東京が文字通り外来者によって作られたことをあきらかにした。中丸宣明氏は近代文学の主要作家たちが地方から上京した人々であることに注目し、それぞれの特徴的な居住地の変遷から都市とは現実の空間のうえに血縁や交友関係などのネットワークが重ねられていることを指摘した。最後に稲葉佳子氏は、新宿歌舞伎町から大久保一帯に視点を据えて、幕末から現代までそれぞれの時代において、江戸時代の下級武士の移住から戦後の旧植民地出身者による興業街形成、今日の多様な背景を持つ外国人たちによるまちづくりまで、さまざまな流入者たちがこのまちの歴史を作ってきたことを論じた。

本セッションによって、江戸東京を景観として平面的に捉えるだけでなく、多様な背景をもつ人々が流入し、さまざまな事情や思惑のもとに作りあげて今に至っているという歴史的経緯を動態としてイメージできるようになったのではなかろうか。

(Session1コーディネーター 小林ふみ子)



法政大学江戸東京研究センターシンポジウム
EToS がつくる 新・江戸東京研究の世界

2021.09.19 (日) 10:00 - 17:00
2021.09.26 (日) 10:00 - 16:00

オンライン配信 (事前申込制・無料)

SESSION1 【都市をつくるのは誰か一定住者と流入者・来訪者、それぞれの役割とまなざし】
コーディネーター | 小林ふみ子 登壇者 | 稲葉佳子、川添裕、高村雅彦、中丸宣明、根崎光男

SESSION2 【都市の表象文化「名所」から「聖地」へ】
コーディネーター | 岡村雅夫 登壇者 | 米原志乃布、増淵敏之、森田 崇、山本貞尚

SESSION3 【コモンズを再生する東京 2021】
コーディネーター | 山道拓人 登壇者 | 石神 隆、北山 信、栗生はるか、小島 聡、蓮見太郎

SESSION4 【EToSの今後 江戸東京研究の可能性をさぐる】
コーディネーター | 司会 | 岩佐明彦、横山泰子 登壇者 | 陣内秀信、田中優子



法政大学江戸東京研究センターシンポジウム
EToS がつくる 新・江戸東京研究の世界

2021年9月19日 (日) SESSION1 SESSION2
2021年9月26日 (日) SESSION3 SESSION4

■開会のあいさつ | 19:00 ~
会場 | HOSEIミュージアム、会場 | HOSEIミュージアム、5年間の振り返り
期内容 | 法政大学江戸東京研究センター特別展

■SESSION1 【都市をつくるのは誰か一定住者と流入者・来訪者、それぞれの役割とまなざし】
山の平と下町、新芝居、近代化と歴史性、アジア的なものとの対峙のなかに
多くの二階性江戸東京を築いてきました。その基礎にある、大層な
ではあるが流入者という構成、とりわけ後者の意識や役割を考へます。
コーディネーター | 小林ふみ子 | 法政大学文学部日本文学専攻
登壇者 | 稲葉佳子 | 法政大学文学部日本文学専攻
司会 | 岡村雅夫 | 法政大学文学部日本文学専攻
高村雅彦 | 法政大学文学部日本文学専攻
中丸宣明 | 法政大学文学部日本文学専攻
根崎光男 | 法政大学文学部日本文学専攻

■SESSION2 | 14:00 ~
【都市の表象文化「名所」から「聖地」へ】
自然と人工が積みあがった江戸の「名所」は、浮世絵や文芸を通して洗練
しました。その背後には、明治期以降のメディアを支えながら育ち続けてい
る、浮世絵、歌舞伎、映画、アニメ、その歴史や未来を語りながら、
都市の表象文化の系譜を辿ります。
コーディネーター | 岡村雅夫 | 法政大学文学部日本文学専攻
登壇者 | 米原志乃布 | 法政大学文学部日本文学専攻
増淵敏之 | 法政大学文学部日本文学専攻
森田 崇 | 法政大学文学部日本文学専攻
山本貞尚 | 法政大学文学部日本文学専攻

■SESSION3 | 10:00 ~
【コモンズを再生する東京 2021】
建築家の実践が作る東京のコモンズ (空間的再生) の存在を捉えます。
また、それらに学習による現地レポートや提案を基にすることで、都市のこれ
からについて考えます。
コーディネーター | 山道拓人 | 法政大学文学部日本文学専攻
登壇者 | 石神 隆 | 法政大学文学部日本文学専攻
北山 信 | 法政大学文学部日本文学専攻
栗生はるか | 法政大学文学部日本文学専攻
小島 聡 | 法政大学文学部日本文学専攻
蓮見太郎 | 法政大学文学部日本文学専攻

■SESSION4 | 14:00 ~
【EToSの今後 江戸東京研究の可能性をさぐる】
江戸東京研究センター設立から5年目の今、これまでの活動もふりかえり、
今後の活動の方向性を考えます。法政大学のアドバンシング・エドモント
ム、外国との共同研究なども視野に入れたトークを行います。
コーディネーター | 司会 | 岩佐明彦、横山泰子
登壇者 | 陣内秀信、田中優子
高村雅彦 | 法政大学文学部日本文学専攻

■閉会のあいさつ
高村雅彦 | 法政大学江戸東京研究センター

関連プログラム
HOSEIミュージアム 江戸東京研究センター特別展
〈人・場所・物語〉
—「Intangible」なもので構築する江戸東京のアイデンティティ—
■会場 | 2021年9月19日 (火) - 10月3日 (日)
※5日、10日の会期は9月20日 (木) まで
■会場 | 5thA | ミュージアム、コア (法政大学特別棟1階)
5thB | 5階特別棟 (法政大学特別棟1階) | 9/19 (日)
5thC | ミュージアム、コア (法政大学特別棟1階) | 9/26 (日)
5thD | ミュージアム、コア (法政大学特別棟1階) | 9/26 (日)
■開場時間 | 10:00 - 17:00 (入場は16:30まで)
■休館日 | 月曜日 (9/20は開館) ■入場料 | 無料

シンポジウム事前申込サイト
シンポジウム聴講を希望の方は EToS のウェブサイトから
申込フォームにアクセスして事前申込をお願いします。
参加回数によって申込締切が異なります。詳細はウェブサイト
をご覧ください。
9/19 (日) の事前申込 | 締切: 9/17 (金) 13:00
9/26 (日) の事前申込 | 締切: 9/24 (金) 13:00
<https://edotokyo.hosei.ac.jp/>

EToS 法政大学江戸東京研究センター
Edo-Tokyo Studies Tel: 03-3254-9062 Fax: 03-3254-9064
E-mail: edotokyo@edotokyo.jp



SHIMADA Yusuke / apgm*

Session2
「都市の表象文化「名所」から「聖地」へ」

コーディネーターは岡村民夫だが、実質的に米家志乃布が共同コーディネーターの役を果たし、「テクノロジーとアート」プロジェクトにおけるコンテンツツーリズム研究および表象文化研究と、「江戸東京アトラス」プロジェクトの名所研究を総合した内容のシンポジウムとなった。絵画や映画等ばかりでなく写真や地図もまた表象文化に属する。すなわち「現実」を間接的に表象しており、そこには歴史的・文化的・集団的な「見方」、価値評価や戦略がはらまれている。私たちは諸表象をそのような厚みをもったものとして受けとめることによって、狭義の歴史学的アプローチでは対象化しにくい感性やメディアの歴史にアプローチできるのである。本シンポジウムでは、「江戸」の地形と物語を通して形成された「名所」から、現代の「東京」のポップカルチャーにおける「聖地」への変遷を、表現ジャンルを横断して浮かび上がらせることを目論んだ。コーディネーターによる趣旨説明後、以下のように4名による研究発表が行われた。

1「名所と視覚的経験—江戸／東京の風景—」米家志乃布（法政大学文学部地理学科教授、歴史地理学）：まず「浮世絵風景画 広重・清親・巴水 三世代の眼」展（2021年、町田市立国際版画美術館）の内容を踏まえながら、「江戸」から「東京」を通じて絵師たちによる名所の「定型」の継承を確認した。そのうえで写真による明治の「名所図会」が、江戸の名所表象に対し東京の「新景」を対置し、より精確に表象していること、明治末から昭和初期の「鉄道案内」や「絵葉書」になると、焦点が歌枕的な名所の想像・観照から鉄道旅行による観光に移ることを、豊富な画像資料を通して論じた。

2「鳥瞰図にみる都市の表象文化」森田喬（法政大学名誉教授、地図学）：「江戸名所図屏風」（17世紀）や北斎「東海道名所一覽」（1840年）から、「大日本東京全景之図」（1907年）や吉田初三郎「関東大震災全地域鳥瞰図絵」（1924年）をへて、山口晃による現代アートとしての鳥瞰図にいたるまで、多様な実例を通じ、鳥瞰図の特徴を、空間情報・アングル・動くものの表象・スケーリング・作成に利用されるテクノロジーなどの諸側面から、理論的かつ歴史的に論じた。気球から東京を撮影した写真が起伏に乏しく平板で物足らなかったせいで、細部や起伏を強調したりデフォルメが施されたりした近代の鳥瞰図が発達したのではないかと、その際、

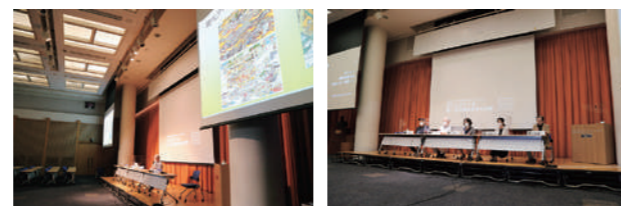
富士山を向いた伝統的アングルが継承されたのではないかと、という仮説が示された。

3「映画・アニメからみる都市表象」岡村民夫（国際文化学部教授、表象文化論）：まず、1970年代まで東京の撮影所の監督たちがロケ撮影とセットを併用しながら「東京」を積極的に描いていたことや、フィクションがかえってその時代の欲望や感情を伝えてくれることなどを説いた。そして、80年代の撮影所システムの崩壊のせいでセットによる東京表現が衰退し、90年代末から諸規制のせいで都心のロケ撮影が衰退し、現在、実写映画の東京表象が著しく貧しくなっているという問題を指摘したうえで、『耳をすませば』（1995年）『時をかける少女』（2006年）『君の名は。』（2016年）等、アニメにおけるロケハンに基づいた東京表象の増加が「聖地巡礼」を促進している展望を、発表者自身の聖地巡礼写真を交え提示した。

4「コンテンツツーリズムと東京」再考 増淵敏之（法政大学大学院政策創造研究科教授、コンテンツツーリズム研究）：コンテンツツーリズムおよび「聖地巡礼」の一般的解説や、『らき☆すた』（2007年）から『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない』（2011年）を経て『鬼滅の刃』（2020年）に至る小史の報告の後、韓国のテレビドラマをめぐる現在のソウル・コンテンツツーリズムの活況を東京の場合と比較し、アニメツーリズムの「聖地」としての東京を国内外に効果的に情報発信していく必要性を説いた。

最後に山本真鳥教授（法政大学名誉教授、文化人類学）が各発表に対してコメントを述べ、それに対する受け答えや、発表者間の質疑応答が活発に展開した。おもな論点となったのは、江戸時代の「名所」の表象から近代の「名所」、そして現代の「聖地」へ移行する過程における連続性と不連続性である。

（Session2コーディネーター 岡村民夫）



SHIMADA Yusuke / apgm*

Session3
「コモンズを再生する東京 2021」

日本における近未来に向けて可能性のあるコモンズとしての場、空間としての「商店街」にフォーカスし、学生の調査提案も行き、同時に都内でコモンズの思想をもちながら地域再生を実現しているプロジェクトの実例を紹介した展示に合わせた内容として【次の近未来—コモンズとコミュニティ、自治】と題してシンポジウムを行った。シンポジウムは主に4つのレクチャーを含むものとなった。

- ・北山恒氏（法政大学客員教授、横浜国立大学名誉教授）昨年度3月のシンポジウム「コモンズを再生する東京」や本グループでの研究成果について。
- ・山道拓人（「都市東京の近未来」グループプロジェクトリーダー/法政大学専任講師/ツバメアーキテクト代表）紐状空間に作る新築の商店街について（下北線路街ポーンストラックについて。鉄道会社とコラボレーションした脱開発的な開発手法。）
- ・栗生はるか（文京建築会コース）路上空間の活用拠点について（地域サロン「アイソメ」について。下町の長屋を地域拠点ヘリノバージョン。町のコミュニティに寄り添うかたちでの建築のあり方。）
- ・連勇太郎氏（明治大学専任講師/モクチン企画代表/@カマタ代表）空間的資源のネットワーク的活用（KOCA について。ネットワーク的に地域課題を解決する方法論。）

これらのレクチャーを受け、ゲストコメンテーターとして、小島聡氏（法政大学人間環境学部人間環境学科教授）、石神隆氏（法政大学名誉教授）からコメントを頂いた。石神氏から、これからのコモンズを考える上で、「龍」を位置付ける必要があるという大変示唆的なコメントがあった。龍というのは、事故のリスク、震災のリスク、協調が必要になるメンテナンスなど、ある種の脅威や手間のかかるコモンズを律するものの喩えだが、そういったものがあることによって単純な利害関係を越えたコモンズの醸成につながるという実践的な方法論として理解ができた。小島氏からは、人口減少のコミュニティにおいては福祉・災害などコミュニティの問題を解決するコミュニティそのものが弱体化しているといったことが論じられ、核家族に適合して成長してきた結果社会における世代間継承可

能性の低下が引き起こされていることが示された。全体討議では縮小の時代の都市型社会論である反転するアーバニズムや、自発的内発的な「龍」、総有主体、などコモンズを考える上で重要なキーワードが多数見出された。

（Session3コーディネーター 山道拓人）



SHIMADA Yusuke / apgm*

Session4
「EToSの今後 江戸東京研究の可能性をさぐる」

シンポジウム第4セッションでは、田中優子法政大学特任教授と陣内秀信法政大学特任教授による講演と座談会が開催されました。第1～第3セッションならびに、同時期に行われたHOSEIミュージアム特別展「〈人・場所・物語〉Intangibleなもので継承する江戸東京のアイデンティティ」の内容をふまえたうえで、今後の研究活動の可能性が語られました。

田中氏は「記憶から創造へ」というタイトルで、「江戸を捨てて東京になった」近現代をかえりみて、江戸という都市の記憶を研究だけではなく東京の改革に使うこと、内発的な発展が大切であると強調しました。何を創造したらよいかについては、三点「自然との対話（水都としての歴史をどこまで取り戻せるか）」「歴史との対話（現代の東京における人口集中の解消 庭園都市の再構築）」「コミュニティの再生（水・水路によるコミュニティ改革、職住一致の生活の長屋のあり方）」を挙げ、過去と東アジアからの学びによって江戸文化が創られたことを述べました。

陣内氏は1980年代の「江戸東京学」が、江戸（近世）と東京（近代）を分けずに研究したことで、多くの成果が生まれたものの、当時の学際的な交流が日本社会から薄れたが、今こそ80年代の「江戸東京学」を越える研究が必要であると述べました。EToSでは、研究対象とする時間と空間を拡大し、江戸東京の特質を解明し、近未来への道筋を示す学際研究が必要であると主張しました。具体的には、水を中心とした地形等の基層、都市の記憶を残す手段としての名所、江戸東京の表象の日本の特徴、アートによる無形遺産の継承、commonsとしての役割を担う商店街の可能性が語られました。その後、お互いの報告についてのコメントが交わされました。江戸文化の持っていた遊びの要素、大組織に属さない自由、自営のスピリット、浮世絵や名所絵の特徴、郊外の見方などについての質疑応答を経た後、陣内氏は、都市と田園が相乗りしないイタリアと比べ、東京は水の資産を生かし江戸以前の歴史の蓄積のある郊外エリアをとりこんで発展している点を述べました。田中氏は、外濠の浄化を東京都に提言したことに言及し、今後も政策提言に関わるような、現在の価値観を変えるメッセージ性の高い研究が重要であると述べました。その後、江戸東京研究センターの研究メンバー、岩佐明

彦法政大学エコ地域デザイン研究センター長と横山泰子法政大学国際日本学研究所長が加わり、さらに活発な議論が交わされました。

(Session4コーディネーター 横山泰子)



SHIMADA Yusuke / apgm*

研究会
「東京写真の新たな可能性」

開催日：2021年1月23日（土）
場所：オンライン配信

本研究会の報告を、開催日程の関係から『法政大学EToS 2020 vol.4』に掲載できなかったので本誌に掲載させていただく。講演者の丹羽晴美氏は現在は東京都現代美術館の学芸員だが、2019年3月まで東京写真美術館学芸員をつとめており、法政大学国際文化学部で「写真論」の講義を長年担当している。「東京」を重要主題とする中堅写真家から、2010年代以降、従来の写真のイメージを超えた制作をしている「いまのり」の「四人」について丹羽氏は以下のように論じた。なお、司会は岩佐明彦氏が担当した。

郡山総一郎は、孤独死された人たちのアパートを撮影したシリーズ「Apartments in Tokyo」（2013～14）で、中断された生活の気配を定着している。そこには鑑賞者にみずかからの生き方を省みさせる力がある。

西野壮平は「Diorama Map “Tokyo-2014”」で、35mmフィルムで撮った数千枚の東京写真を手作業でカラーージュし、「ジオラママップ」として呈示した。ミス写真や、建物の尺度と不整合なポートレート写真をあえて組み込むことによって、彼自身が体験した東京が、生動する生き物のようにダイナミックに表現されている。

鈴木のみは「Other Days, Other Eyes」シリーズ（2013～）で、さまざまな部屋をピンホールカメラに仕立てて窓に風景を焼き付けたり、窓から見える光景の写真を窓に転写したりし、そうした写真を窓枠ごと展示している。「ヴァンキュラー写真」の影響を受けながら、鈴木は日常生活のなかに存在する無名のなんということのない風景を残したいと思っているのだろう。

東京に長年暮らす春木麻衣子の「either portrait or landscape」（2010）は、匿名的な風景（たとえば歩道橋）を判別しがたいほど露出をアンダーにし撮影し、抽象画のように画面構成したシリーズであり、大都市東京の中で「私」は擦れ違う他者からどう見えるのか、人々はどのような距離にあるのかといったことの再考を鑑賞者に促す。

丹羽氏は、彼らの仕事が「都市のなかに内在化しているもの、潜在化して気にならなくなっているようなものをわざと浮かびあがらせ」という共通性を持っており、そこにこそ「東京

写真の新たな可能性」があるとまとめた。

コメンテーターの岡村民夫は、共通する特徴として、特異な制作行程やインスタレーションを通して都市のなかの時間、痕跡、アノニマスなものを表現していると感想を述べたうえで、西野壮平の「ジオラママップ」と、現代の巨匠画家デイヴィッド・ホックニーが1980年代に手がけたフォトコラージュとの比較を行った。陣内秀信氏が四人の写真家の作品の視点の自由さや多様性に日本らしさを感じると述べ、東京という都市のダイナミズムがそれを支えているのではないかとコメントしたことも付記しておく。

(岡村民夫)

江戸東京研究センター「テクノロジーとアート」プロジェクト研究会
東京写真の新たな可能性

現在、東京や都市生活をテーマに作品制作に取り組む中堅写真家たちが国際的な注目を浴びています。街並みや建築、人々の生活など、個々の表現を遡っていくと、都市と人の関係や、日常生活に於ける歴史の無意識のようなものが起ちあがってきます。かつて20世紀の都市を切り取った写真家達との共通点や差異を再考し、写真表現の可能性をあぶりだします。

【報告者】 丹羽晴美（東京都現代美術館学芸員）
【司会】 岩佐明彦（法政大学デザイン工学部教授、江戸東京研究センター研究員）
【コメンテーター】 岡村民夫（法政大学国際文化学部教授、江戸東京研究センター研究員）

2021年1月23日(土)14時～15時30分
オンラインにて開催
(オンライン会議システムZoomを使用します)

参加無料・事前申込が必要です
事前申込：https://forms.gle/2x26WxibM6zW82sv9

EToS 江戸東京研究センター
Edo-Tokyo Studies

法政大学
HOSEI University

法政大学江戸東京研究センター
〒102-8302 東京都千代田区千代田1-7-1
Email: edotokyo-jm@hosei.ac.jp

シンポジウム
「コモンズを再生する東京」

開催日：2021年3月13日（土）
場所：オンライン配信

「江戸東京研究センター」EToSの「都市東京の近未来」では、2021年3月13日にオンラインシンポジウムを開催した。コロナ禍のためオンラインシンポジウムは当たり前になっているが、臨場感がないと視聴者が受動的になるので、事前に紙媒体のリーフレットを視聴登録者にお送りすることにした。そのリーフレットはシンポジウムで話される全容をテキスト化し、都市内に存在する実例を写真・図面で紹介した。視聴者はシンポジウムの全容を把握しながら、随時手元資料を見ながら参加でき、その資料が手元に残るという構造である。近年、東京の都市内で登場している新しいまちづくりの動向について、栗山はるか、山道拓人、仲俊治がその実例のプレゼンテーションを行った。さらに、法政大学大学院都市デザインスタジオの学生による東京区部1,771の商店街の調査、そして、そのなかから5つの商店街を選んで商店街を中心としたコモンズの再生プロジェクトをプレゼンテーションした。さらに、この新しい活動に対して都市研究者である大野秀敏、織山和久、北山恒、陣内秀信、渡辺真理が、理論的に評価する論考を多様な立場から展開した。

「都市東京の近未来」では、プレ近代としての江戸、そして明治維新後の東京という都市を連続的に研究することで、ヨーロッパ文明を相対化した都市研究を行っている。そこでは、20世紀に西ヨーロッパで始まったモダニズムという建築運動を乗り越えるような、新しい建築や都市の論理をつくれなかと考えている。現在ある建築・都市の論理はほとんどすべてヨーロッパ由来のものであるが、これから始まる新たな都市の研究はポスト産業社会を迎えた日本、ここから未来の都市論理がつくれるのだと考えている。明治維新は日本という国家のシステムを、封建社会から産業化を中心とした社会システムに切り替えた切断面であり、この切断面によって鏡面のように江戸と東京を比較することができる。明治以降、都市に産業を集積させる近代化のなかで急激な拡張と拡大を進め、人口が膨張した。2011年あたりをピークとして日本の人口は減少し、そこでは拡張しない社会＝定常型社会への構造変換が求められている。江戸が

ら東京という都市に変容したこの都市はさらにもうひとつの東京に変容しつつあるのだ。現代社会には複数のシナリオが存在する。さらなる経済の拡張を求めるものもあるが、経済格差の少ない豊かな社会、地球環境を保全する生活を求める未来も存在する。このシンポジウムは、もうひとつの東京として「コモンズを再生する東京」というシナリオを描こうとするものである。リーフレットを事前に配布するという新しいオンラインシンポジウムの構造のせいか、視聴者には大学教員や都市研究者などが多数参加しており、途中退席の視聴者はほとんどいなかった。

(北山恒)



研究会
「東京と今和次郎—『動き』としての惑星都市論—」

開催日：2021年7月31日（土）
場所：オンライン開催

「近年、欧米を中心に『惑星』的な思考法への注目が高まっているが、そのような世界観は、戦前の日本においても、建築学者の今和次郎によって先駆的に表現されていた。」クリストフ・トゥニ (Christophe Thouny)氏は、本報告において、こうした主張を今和次郎の『新版大東京案内』などを手がかりに展開した。「惑星 (planetary)」は近年、ポストコロナ理論・比較文学のガヤトリ・C・スピヴァックや都市論のニール・ブレンナーらによって展開されている議論であるが、トゥニ氏は、それらを踏まえながら「惑星」を「他者の空間 (space of alterity)、開いた全体性 (open totality)、絶え間ない動きの場 (continuous field of movement)」として独自に概念化する。それは、都市を分離切断された閉じられた空間としてではなく、郊外や地方とつながった、あるいは世界各地の場所に開かれた「外部なき世界」としてとらえる視座である。また、その都市は、静的なものではなく、常に動き続ける場所であり、そこに住み、活動する人々は、あくまでも自然やインフラなどのモノと同じく、都市の全体性を構成する一要素でしかない。ただし「惑星」的な思考は、世界に開かれるとは言っても、時に「グローバル」という言葉がもたらすのっぺりとした一元的な世界観ではなく、むしろローカルが「強度化 (intensify)」され、人々がすでに具体的なローカルな空間から世界へとつながっている (be entangled) ことを強調するような概念だという。こうした新たな視点は、モダニティを越えた現代においてはじめて展開されるようになったと考えられているが、トゥニ氏は、まさに日本が近代化を推し進めていた戦前、戦後の東京を調査した建築学者、民俗学研究者の今和次郎の仕事に類似した世界観を見出した。1929年に出版された『新版大東京案内』や『考現学入門』におさめられている論考には、様々なユニークな東京の都市、風俗が描かれており、それらには今の「惑星的」な指向性が見取れるという。人々が手作業で作るバラックに彩られた装飾への着目は、今和次郎が現在で言うDIY (do-it-yourself) がもたらす「偶然の美しさ」に着目した証左であった。また、井の頭公園に集う人々の行動を描いた地図からは、人が環境に「吸収されていく」あり様が浮かび上がり、今和次郎が空間を環境と人間の相互行為と

法政大学国際日本学研究所との共催

してとらえていたことのあらわれと見なすことができるという。そして、銀座、新宿、上野、浅草などの人流を人々の属性に分けて数値化した「盛り場人出分析表」などは、今がまさに「動き」として東京をとらえていたことを示している。トゥニ氏の報告は、江戸東京学、グローバル都市論を踏まえて展開された議論であると言える。そこで、コメンテーターの陣内秀信氏からは、専門的な知見に基づく鋭いコメントや質問が寄せられた。「惑星」概念は、グローバリゼーションが都市にもたらす負の側面を突き抜けるアイデアとなりうるのか、また近年議論されている都市におけるコモンズの問題と「惑星」はどう結びつくのか。そして、今和次郎と東京の問題についても、今が描いた東京は1930年代という時代的な背景が色濃く反映しているのではないかと述べ、今の仕事が再び注目される1980年代と1930年代の東京の類似性が指摘された。更には、当日参加された町村敬志氏からも「惑星」的な東京において国家というアクターがどのような役割を果たしているのかという都市社会学の視点からの質問も出された。トゥニ氏の報告は、現在準備している書籍 (仮題 Dwelling in Passing) の一部であり、氏の発想には、欧米、アジアの各地の都市を自らが「動き」ながら生活をしてきた経験が反映されているという。東京をユニークな想像力で描いた今和次郎の仕事に、「惑星」論に基づいたトゥニ氏の独自の発想力が加わった報告と、それを踏まえた世代、ナショナルリティを越えた開かれた議は、参加者に自由にイメージをし、考えることをうながす刺激的なものとなった。

(法政大学国際日本学研究所専任所員 高田圭)



シンポジウム

「都市の表象文化ーアニメ・特撮における東京」

開催日：2021年7月17日（土）

場所：オンライン配信

本シンポジウムは、これまで江戸東京研究センターでほとんど扱われてこなかったアニメと特撮映画を本格的に対象とすることで、東京の表象をめぐるアニクチュアルな動向を浮かびあがらせようとしたものである。

司会者であり、「テクノロジーとアート」プロジェクトリーダーである岡村民夫が、基調講演「アニメ・特撮における東京表象の意義」を行った。日本の実写劇映画においては、社会的諸制約によってゼロ年代前後から東京都心部でのロケ撮影が著しく減少しているが、それと反比例するかのように、ロケハンをもとに東京都心部および東京西郊を精緻に再現したアニメ映画（宮崎駿『風立ちぬ』、細田守『バケモノの子』、新海誠『君の名は。』等）が増加し、若い観客の支持を得るようになった。岡村がこうしたアニメ映画を、実写劇映画における都心表象の欠落を補完しているだけでなく、しばしばアニメならではの表現力を通し、異界、荒ぶる自然、過去ないし未来から「東京」をダイナミックに捉えなおしていると価値づけた。そして、こうしたロケハン東京アニメの先駆が80～90年代の高畑勲、宮崎駿、押井守、大友克洋の作品に見られることや、しばしばそこで東京西郊が取り上げられていること、50～60年代の特撮怪獣映画の影響が認められることを指摘した。そしてゼロ年代以降の映画やアニメの制作過程におけるデジタル化の進行によって、現在、実写劇映画、特撮映画、アニメ映画がたがいに急接近しつつあるという展望を呈示した。

次に、日本近代史の研究者であるとともに特撮映画に造詣が深い安智史氏が「特撮映画の東京 1950～1960年代、東宝SF映画を中心に」を講演した。宮崎駿、庵野秀明、樋口真嗣の相関関係を語るなど、基調講演の内容を補ったのち、『ゴジラ』と『モスラ』を中心に、かつての特撮映画がどのように東京が表象されていたかが、当時の社会状況を踏まえながら詳述された。怪獣によって破壊される主要エリアは、社寺や木造家屋が多い隅田川西域ではなく、モダンなビルや橋の多い東側に偏っており、そこには大震災や大空襲からの復興の象徴的建築物を改めて破壊するというコノテーションがあること、ただし怪獣による都市破壊が、あからさまな虚構性ゆえに観客に恐怖よりもカタルシスをもたらすことが説

かれた。また『モスラ』のユニークな側面として、この怪獣が走破するエリアが、都市型近郊農村地帯かつ基地のある地帯としての「武蔵野」であることが指摘された。

最後に、『ナウシカ考 風の谷の黙示録』（岩波書店、2019）の著者で民俗学者の赤坂憲雄氏が「ジブリアニメの武蔵野」と題した講演を行い、小平市で育った自身の経験と比較しながら、主に『となりのトトロ』『平成狸合戦ぽんぽこ』『耳をすませば』を論じた。狭山丘陵をモデルとした宮崎駿の『となりのトトロ』には、区画整理以前の水田、相互互助的人間関係、異界の気配をたたえた「奥」、療養所が点在した武蔵野が繊細に描かれている。他方、高畑勲の『平成狸合戦ぽんぽこ』は、狭義の「武蔵野」に隣接する多摩丘陵（小山の雑木林と谷戸の水田からなるモザイク）におけるニュータウン開発史を狸たちの側から描いているとし、その微妙な違いが強調された。近藤喜文の『耳をすませば』は建設から20、30年後の多摩ニュータウンを舞台にしており、そこで生まれた子供たちがノスタルジーなしにどう生きていけるかが問題になっているという点で、『平成狸合戦ぽんぽこ』の批判となっていると指摘された。

パネリストとの質疑応答は生産的なものだった。山本真鳥氏は新海アニメに関して、橋、坂、階段、神社など、民俗学的な境界が頻出することを指摘し、横山泰子は都市化と自然の存在との葛藤という角度から怪獣を江戸の妖怪と比較し、岩佐明彦氏は建築関係者のSNSで、ゴジラが誰によって設計された建物を破壊したか熱い話題となっていることを紹介した。

（岡村民夫）



シンポジウム

「玉川をめぐる名水と歴史と景観～『中世武蔵国絵図』の読み解き～」

開催日：2021年8月28日開催報告

場所：オンライン配信

2021年8月28日（土）、シンポジウム「玉川をめぐる名水と歴史と景観～『中世武蔵国絵図』の読み解き～」を開催いたしました。リモート開催とし、2部構成にして、第1部は事前配信し、第2部をシンポジウムとパネルディスカッションとしました。事前申込者は140名（8月2日時点）で、当日第2部参加の最大数は97名でした。

このシンポジウムは、2020年11月11日に「サバイバルエコロジー」と題して、神谷博法政大学退任記念「環境生態学」特別講義を行いました。その続編にあたるものです。時間がとり切れずに歴史部分をカットしたため、それを今回フォローしました。また、シンポジウムは、2019年3月23日に実施した江戸の基層シンポジウム「古代・中世の府中から武蔵國を探る」を継承するものとしても位置付けていました。「中世武蔵国絵図」については、申込時に希望者に郵送を行いましたが、用意した100部がはげ、ほぼ残部はなくなりました。主催は、法政大学江戸東京研究センター及び法政大学エコ地域デザイン研究センターですが、共催として国分寺名水と歴史的景観を守る会が加わり、後援に多摩川流域懇談会、野川流域連絡会、みずとみどり研究会、多摩川センターの4団体が加わりました。

【プログラム】

第1部〈事前配信〉

「中世武蔵国絵図」の解説（神谷博特別講義続編）
（YouTube動画公開）

名水と歴史的景観の保全をめぐる／中世武蔵国絵図の解説／玉川源流の伝承：畠山重忠と玉姫の物語／玉姫神楽公演

第2部〈ライブ配信〉

「中世武蔵国における玉川と国府・国分寺」～歴史的景観と伝承をめぐる～話題提供と意見交換

登壇者：小野一之（大東文化大学非常勤講師）「古代と中世／多摩川と玉川」／依田亮一（国分寺市教育委員会）「恋ヶ窪の中世遺跡と畠山重忠伝承」／神谷 博（法政大学江戸東京研究センター客員研究員）「武蔵野景観考」／コメン

テーター：陣内秀信（法政大学名誉教授）

【まとめ】

参加者も多く、絵図にも高い関心が寄せられ、パネルディスカッションもよい意見交換ができました。府中や国分寺に残る中世の伝承について掘り下げた議論ができたことで、「伝承」の持つ現代的価値を再認識する機会となりました。反省点としては、リモート開催のネット環境が不十分だったことで、パネルディスカッションの内容が聞きづらかったとの反応がありました。成果としては、EToSの水都プロジェクトの一環である江戸基層研究と、エコ地域デザイン研究センターの府中玉川プロジェクトに跨る研究企画として継続できたこと、及び地域の自治体及び市民団体との連携を深めることができました。中世江戸基層研究としては、今後の課題として関八州を視野に入れた取り組みを継続し、深める必要があると感じました。

（神谷博）



「江戸東京アトラスワークショップ」

開催日：2021年10月23日（土）
場所：法政大学デザイン工学部 市ヶ谷田町校舎スタジオ HAL

「江戸東京アトラス」プロジェクトでは「名所の変遷から江戸東京の基層を探る」をテーマとし、デザイン工学部の福井恒明教授と文学部の米家志乃布教授の研究室協働による江戸東京アトラスの作成を行っています。今回のワークショップでは、江戸時代の浮世絵や東京名所図会・東京案内に描かれた内容やその特徴を地図上に表現した結果をもとに、江戸・東京の名所の特質と変遷についてディスカッションを行いました。

まず、プロジェクトリーダーの福井恒明教授から、本プロジェクトの趣旨説明があり、最初に、『名所江戸百景』にみる江戸の周縁領域認識と題し、デザイン工学部景観研究室のグループによる発表が行われました。史料を構成する個々の浮世絵に描かれた「地」の風景に対する視点・視対象分析にもとづいて、江戸の周縁領域に対する人々の認識を明らかにする試みです。江戸周縁部がどのように描かれ、それがどのような意味を持っていたのかを考察しました。次に、同じく景観研メンバーにより、明治初期における水の地図として、赤坂を事例として、小河川や湧水を復元した地図のプロトタイプが披露されました。

続いて近代東京がテーマです。米家ゼミのグループは、『新撰東京名所図会』『東京近郊名所図会』『大東京案内』に取り上げられた名所の分類や分布について地図上に表現し、これらをもとに、江戸に由来する寺院・神社などの名所と近代以降の新しいモダンな名所（学校や橋など）の変遷について議論しました。大学院歴史地理学研究会のメンバーは、『江戸史蹟』『東京史蹟』の史料にもとづき、史蹟の分布変遷を明らかにしました。戦後における東京都文化財の分布傾向も補足説明がありました。

当日の議論では、学部生11名、大学院生11名の参加のもと、田中優子特任教授、陣内秀信特任教授をはじめ、森田喬名誉教授、横山泰子教授、小林ふみ子教授といった江戸東京研究センター所属の先生方から多くのアドバイスやご意見をいただきました。学生グループによって、すべての発言はオンラインホワイトボードのmiroに記録され、最後に、それをもとに議論のふりかえりも行いました。

これらの成果は、引き続き地図表現のブラッシュアップを行い、オンライン上での成果の公開とともに書籍化についても検討されることになりました。当日、参加して下さった先生方、学生・院生の皆様、事務局に感謝いたします。

（米家志乃布）



シンポジウム

「落語がつくる『江戸東京』イメージ」

開催日：2021年11月23日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス（オンライン配信併用）

「江戸東京のユニークさ」プロジェクトでは、2021年11月23日にシンポジウム「落語がつくる『江戸東京』イメージ」を開催しました。コロナ禍により、2021年度の研究企画はオンライン主体で行ってまいりましたが、今回は十分な感染対策をしたうえでの対面によるシンポジウム（オンライン併用）にふみきました。参加者は68名でした。

第一部は「動く江戸東京落語」というタイトルのもと、落語地名研究家の田中敦氏、横浜国立大学名誉教授の川添裕氏をお招きし、時代の変化に応じて動き続ける生命体としての落語の魅力を語っていただきました。江戸東京の落語地名の詳細なデータを作成された田中氏は「地名から見た落語の多様性」として、ハナシが東西相互に移入する際に地名を置き換えながら、適応し、定着していく様子を具体的な事例とともに語られました。川添裕氏は、落語の地名は頻出度の点で極めて偏っていること、死や弔いをよく描出する落語を「死があつての生命賛歌」と述べました。江戸時代から現代にいたるまで、落語においては、登場人物はもちろん、演者も、ハナシもまさに動き続けていることが確認されました。

第二部は「落語のなかの長屋空間」をテーマとし、落語で表現される長屋がいかなる空間で、どんな人物が描出されるのか、金原瑞人法政大学社会学部教授、中丸宣明法政大学文学部教授、田中優子法政大学江戸東京研究センター特任教授に、それぞれの観点からの報告をお願いしました。金原氏は英文学やフランス文学の事例、生活実感に基づいた長屋をファンタジーとみる見方など、落語の世界にとどまらない広い観点からの話題を提供していただきました。19世紀日本文学の中丸氏は、明治期の落語速記本の調査結果から、裏店としての裏長屋と山の手の三軒長屋形式の新長屋が一体化して表現されるにいたったこと、明治人は長屋生活に近代のメンタリティと古い人間関係の両方を見ていたと語られました。田中優子氏は、「実在の長屋はごく普通の住まいであり、長屋全体がまちを形成していた」点に重点を置き、長屋ばなしに見られる人間関係の特徴を考察されました。その後、現代東京で実際に長屋の管理・再生活動を行っている栗生はるか江戸東京研究センター客員研究員がイタリアからオン

ラインで参加、落語的なコミュニティのあり方、その可能性について意見交換がなされました。オンライン併用ではありませんでしたが、対面形式をとったことにより、落語の生命力が登壇者から聴衆へ伝えられた楽しい機会となりました。

（横山泰子）



落語がつくる「江戸東京」イメージ

第1部「動く江戸東京落語」10:30-12:30
第2部「落語のなかの長屋空間」13:30-15:00

主催：法政大学市ヶ谷キャンパス 外濠校舎S205教室

参加無料・事前申込制

ETOS

シンポジウム

「東アジア近世・近代都市空間のなかの女性」

開催日：2022年2月28日（月）

場所：オンライン配信

本企画では、都市の経験はジェンダーによって異なることを前提に、それを女性が書き手としてどう記述したか、また文芸にどう描かれたかという両面から考察した。対象としたのはジェンダー規範の相違が大きかった近世～近代の文芸である。昨年実施した「漢陽と江戸東京」シンポジウムの取り組みを発展させ、この課題を東アジア都市との比較において考察することによって、それぞれの特徴とともに共通点を浮かびあがらせることを企図した。

午前・午後3つのパネルで、あえて国別にせず課題意識を交錯させることを試みた。

第Ⅰ「身分・規範と都市」では2つの報告がなされた。山田恭子氏（近畿大学）による「朝鮮後期女性詩人の特徴とその周辺環境」では、婦徳を求める社会の規範と折り合いを付けつつ政権中枢に近い家系を中心に多くの女性漢詩人が輩出、母娘揃って詩集を出した例もあったこと、ソウルでは詩社が結成されてそこでは才能ある妻たちが集って詩作を行った例もあることが報告された。続いて仙石知子氏（二松学舎大学）の「明清小説のなかの女性」では、士庶に属する女性と賤の身分におかれた娼妓では、求められる貞節が異なっていたこと、そのうち後者は都市特有の存在で、都市においては貞操規範に揺らぎが生じていたことが『三国志演義』や白話小説集『諭世明言』の一話を取りあげて論じられた。ディスカッサントの横山泰子氏（法政大学）の質問に対して、山田氏から朝鮮の女性たちは外出の機会が乏しく都市の風景描写はほぼなかったこと、仙石氏からは中国には女性の詩人はみられるものの散文の作家の記録はないことについて応答があった。

Ⅱ「都市の可能性」では3つの報告が行われた。岩田和子氏（法政大学）「訴えに行く女性たち—清代唱本の一側面—」においては、夫の無念を晴らすべくその妻と娘が都市へ訴訟に出るといった四川の語り物『滴血珠』が人気を博し、広く展開されたことが論じられた。ここでは都市が正義や公正を手に入れる場として描かれており、実際の社会でも女性が公の場に出ることへの忌避という社会規範を超えて女性の訴訟が広がっていたとする研究も紹介された。小林ふみ子（法政大

学）「江戸へ奉公にゆく娘—「婦人亀遊」の戯作から—」では「婦人亀遊」と署名する作者が男性による偽装とされることを疑問視、その作『世之助喃』が定番的な枠組みの外側に付した女性の物語から起筆するなどから女性と考えられることを前提に、都市を女性が危険にさらされる場と描きつつ、戯作という都市文化に手を染めていることを指摘した。高永爛氏（全北大学）「朝鮮古典小説『雲英伝』の宮女と漢陽—欲望の都市ソウルを中心に—」は、街並みを具体的な舞台背景にした作品群を論じた。才能ある女官が集い、女性の行動規範の厳しい朝鮮にあって通行禁止が解除される日がある、都市構造の複雑さなどの要因が絡みあって女性の主体的な恋愛を描く小説が可能になったこと、都市の華やかさを背景に経済的な打算も働かさず描かれたことも紹介された。ディスカッサントの染谷智幸氏（茨城キリスト教大学）からは、それぞれに裁判小説の系譜のなかの位置づけ、少ないながらも他の女性散文作者の存在、朝鮮小説の中国作との区別の難しさなどが指摘され、議論の展開の方向性が示された。

Ⅲ「女性が描く近代都市」では2つの報告があった。呉翠華氏（元智大学）「清末民国初期台湾女性の都市—『楊水心日記』にみる—」は、伝統的な教育を受けた有力者男性の妻としての女性の経験を綴った日記から、積極的に外出し、婦人団体の活動にも参加した外交的な姿を描出した。藤木直実氏（法政大学）「百貨店文化と女性作家—森しげ、与謝野晶子の『三越』掲載作品を中心に—」は、『三越』はじめ百貨店発行の雑誌において『青鞜』同人でもあったような女性作家たちが起用され、販売戦略を推進するモデルとしての役割を果たす結果になった一方で、その作品では不倫や同性愛的行為などそこで理想化された近代家族からの逸脱も同時に表現される一面もあったことを論じた。ディスカッサント・中丸宣明氏（法政大学）はいずれにおいても近代家族の典型が描出されていることを指摘しつつ、しかしなぜそこからの逸脱が描かれるのかという問題提起がなされた。

総合討論ではまず、大木康氏（東京大学）より、女性には身分・地位の問題が大きく、とくに娼妓は都市的存在であるこ

と、妾の位置づけの社会による違い、都市は農村とは異なり不特定多数の男性との接触がある場で、中国では主張する都市の女性が描かれる傾向があることなどがコメントされた。最後に田中優子氏（法政大学）より、日本では韻文を中心に非常に多くの表現者がいた一方で、裁判の物語は乏しいのは騒動の決着方法が異なること、『青鞜』が消費文化のなかにあったことの影響力の大きさなどが指摘され、その後さまざまな討論が行われた。社会規範によって違いも大きい一方で、都市ではその制約から脱した行動が可能になり、文化資本へのアクセスによって文化の生産に携わる機会が得られるなど、女性にとって共通する都市の意義がみえてきた。男性にも同様の部分はありつつも、規範の縛りが大きい分女性にとってはその意義は大きいことが見えてきた1日であった。

（小林ふみ子）



シンポジウム
「異域から国土へ『近世蝦夷地の地域情報 日本北方地図史再考』出版記念シンポジウム」

開催日：2021年8月4日（水）
場所：オンライン配信

16世紀以降、ヨーロッパ諸国や江戸幕府などの手によって蝦夷地に関するさまざまな地図が作られてきました。その表現は海岸線を表現するものから沿岸の集落を風景画的に表したもので多岐にわたります。これらの地図の変遷をたどると、日本にとって異域であった蝦夷地が、地図による地域情報の表象を通じて国土に包摂されていく過程をたどることができます。

こうした蝦夷地／北海道の地図に関する研究成果をまとめた『近世蝦夷地の地域情報 日本北方地図史再考』（法政大学出版局）を2021年5月に出版しました。本シンポジウムでは、書籍には掲載できなかった地図のカラー画像を用いながら、日本の北方地図史の展開をたどりました。

コメンテータには、日本地図学会会長の森田喬・法政大学名誉教授、日本の怪談文化研究者で前江戸東京研究センター長の横山泰子・法政大学教授をお迎えし、司会進行は、プロジェクトリーダーの福井恒明教授がつとめました。オンライン開催でしたが、江戸東京研究センター所属の学内研究員の皆様から、多くのご意見やご感想をいただき、会終了後のメーリングリストでの意見交換も大変盛り上がりしました。

本書は、読売新聞、北海道新聞をはじめ、様々なメディアで紹介されました。これを機会に、地図研究の奥深さ、面白さが多くの人々に伝わることを願っています。

（米家志乃布）



「江戸東京研究センター2020年度報告会」

開催日：2021年3月16日（火）
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

迎える2021年度は、文部科学省から本事業が採択された当初計画の最終年度となります。そこで、この年度報告会では、その成果の公表と今後の展開を見据えて2021年9月に開催するシンポジウムと特別展の内容について深く議論しました。

また、現実には文理融合が難しいなかで、ようやく共同することができたわれわれの組織の持続を企図して、2021年度秋に大型の研究費を申請するために、2022年度以降のビジョンについて話し合いました。その結果、①二項対立ではない有機的な繋がりとしての都市と田園の関係、②それに対する文化的景観の有効性、③モニュメントではない名所という概念・カテゴリーの組み立て、④歴史・文化的アイデンティティの実態と継承の方法、⑤バーチャルとリアリズムによる表現の自由、⑥地形などの自然条件と古代中世という都市の基層への着目、⑦場所・空間・環境を一体に捉える考え方、⑧人間と社会が作り出す様々な都市とスケールの関係の把握と効果の8つをテーマとして据えながら、「都市のイメージ・表象、都市性、ジェンダー」、「都市の表象文化、名所、アニメ」、「コモンズとコミュニティ、自治性」、「定常型社会、持続性」の4つを重要なキーワードとして位置付け、今後の研究を推進していくことが決まりました。まだまだEToSの新・江戸東京研究の活動は続きます。

（高村雅彦）

第12回外濠市民塾オンラインレクチャー
「“濠”で囲まれた日本の都市…“外濠”の原景を探る」

開催日：2021年5月21日（金）
場所：オンライン配信

2021年5月21日（金）、第12回外濠市民塾 オンラインレクチャー「“濠”で囲まれた日本の都市…“外濠”の原景を探る」を開催しました。今回は初のオンラインイベントとして実施しました。高道昌志・東京都立大学助教（エコ研客員研究員）の司会で開会し、郷田桃代・東京理科大学教授による紹介ののち、東京理科大学の伊藤裕久教授にご講演いただきました。ヨーロッパや中国の都市を題材に城壁で囲まれた都市と濠で囲まれた都市を比較し、濠に囲まれた城下町由来のものが多い日本の都市のルーツを古代から紹介いただきました。近世城下町では、武家地・町人地・寺社地など各々が独立した都市的存在を、都市全体を囲む外濠が統合したと考えられること、特に江戸城外濠は中と外を隔てるだけでなく、それらを繋ぐことも想定された、「分節」空間であったと考えられることなどをご紹介いただきました。講演後には活発な質疑が行われ、最後に福井恒明・法政大学教授（エコ研兼担研究員・江戸東京研究センター兼担研究員）による挨拶で終了しました。参加者は主催者を含めて全体で最大89名となり、対面実施と同様に盛況となりました。

（福井恒明）



第13回外濠市民塾オンラインレクチャー
「外濠150年—未完の都市計画公園としての外濠変遷—」

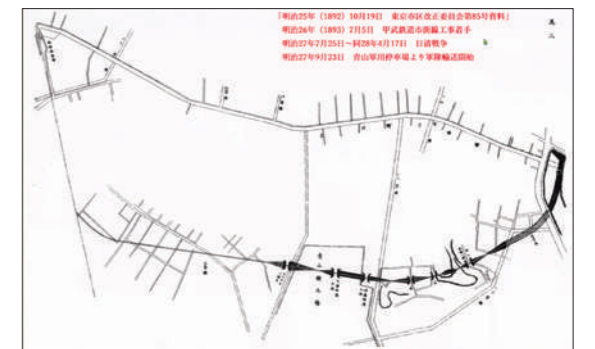
開催日：2021年7月21日（水）
場所：オンライン配信

2021年7月21日（水）、第13回外濠市民塾オンラインレクチャー「外濠150年—未完の都市計画公園としての外濠変遷—」を開催しました。前回に引き続きオンラインイベントとして開催しました。小藤田正夫さん（元元千代田区役所職員・NPO法人神田学会理事）にご講演いただき、福井恒明・法政大学教授（エコ研兼担研究員・江戸東京研究センター兼担研究員）の司会で進行了しました。

小藤田さんは千代田区に関する膨大な古写真、古地図、図面、絵はがき等をお持ちです。今回はその中から外濠に関する資料を選んでご紹介いただきました。幕末から昭和戦前期を中心に、明治初期の外濠の状況、外濠を利用して甲武鉄道（現JR中央線）が敷設されていく様子、東京市（当時）による外濠公園計画の貴重な図面などをご紹介いただきました。その上で、現在の外濠をよりよくするためには行政上の管理の仕組みが複雑であることを指摘いただきました。

参加者は主催者を含めて最大56名でした。

（福井恒明）



第14回外濠市民塾オンラインレクチャー
「タイムトリップ・江戸から東京へ千代田と江戸城外堀の風景」

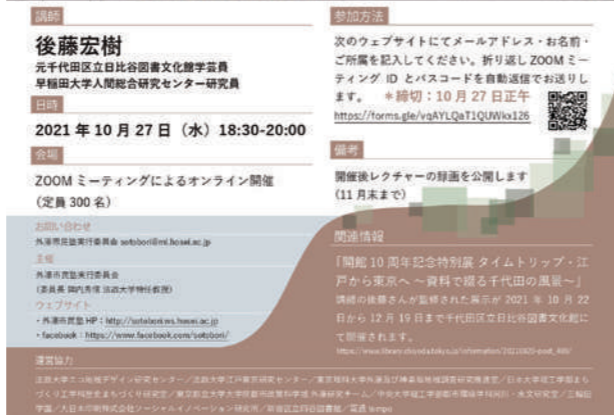
開催日：2021年10月27日（水）
場所：オンライン配信

2021年10月27日（水）、外濠市民塾としては3回目のオンラインイベントとなる第14回外濠市民塾オンラインレクチャー「タイムトリップ・江戸から東京へ千代田と江戸城外堀の風景」を開催しました。後藤宏樹さん（元千代田区立日比谷図書文化館学芸員、早稲田大学人間総合研究センター研究員）にご講演いただき、福井恒明・法政大学教授（エコ地域デザイン研究センター兼担研究員・江戸東京研究センター兼担研究員）の司会で進行しました。

後藤さんは江戸城の歴史について大変造詣が深く、千代田区立日比谷図書文化館で開催されている「日比谷図書文化館開館10周年記念特別展 タイムトリップ 江戸から東京へ～資料で綴る千代田の風景～」(会期2021年10月22日～12月19日)の監修をなさっています。今回は、江戸城外堀跡とはどのような史跡かを図面や写真と共にわかりやすくご紹介いただいたのち、千代田区・新宿区・港区が作成した「史跡 江戸城外堀跡保存管理計画(平成20年3月)」に記載されている外濠および周辺地域の価値と将来像、さらに外濠に関する遺構についてご説明いただきました。ご講演の最後には江戸城の全体の価値を伝えることの重要性と、そのために取り組んでいる活動についてもご紹介いただきました。

参加者は主催者を含めて最大48名でした。

(福井恒明)



講義
「東京MAP」の作成

江戸東京研究センターは、個々人の研究の推進や外部との連携だけでなく、学生を中心とする学内への周知とその魅力的な世界への誘導が欠かせない。このことは、将来の江戸東京に関わる研究者や社会人の育成という意味でも重要なミッションである。そこで、デザイン工学部では学部2年生が主体となり、修士課程の大学院生がアドバイザーとなりながら、自分たちの視点で「新しい東京の地図」をつくるという演習の講義を行っている。

東京を歩けば、個々の場所の独自性が実に多様であることがわかる。しかしながら、自分自身が物を見て判断するための「モノサシ」を各自がもっていなければ、何を見て、どのように評価づけるのかがわからない。人によって見ているモノも違えば、見方も異なるのである。それを正しく見る目を育てるのがこの講義の目的である。東京をテーマに、自分自身が興味をもったまちや建築、地域、空間を選び出し、その特徴を読み解いて、それをマップ化することにより、その「モノサシ」を各自が身に付けるのである。同時に、東京のさまざまな地域の多様な資産を掘り起こし、そこに光を当てて価値付けて提示する作業でもある。作品の詳細はホームページをご覧ください。

(高村雅彦)

プロジェクト
「東京発掘プロジェクト 水辺編」

デザイン工学研究科建築学専攻の院生を中心に、東京の水辺を対象として、その土地や建築、人々の営みを歴史的に解読し、その価値を発掘して、そこからさらに水とまち、人の関係を復元しながら新たなデザインの提示に至るまでを目指したプロジェクトである。毎年、カラーの報告書を発行している。テーマの発想やプロジェクトの推進は、当センターの客員研究員で、東京スリバチ学会会長の皆川典久氏が担い、当センターにとって強力なサポートを得ることができている。

(高村雅彦)

講義
「フィールドワーク」

デザイン工学部建築学科では、学部3年生に演習講義名「フィールドワーク(建築)」を設置している。学生たちが主体的に東京のまちに出て、おもしろそうなもの、価値のありそうなものを見つけ出し、実際のフィールドを通して都市や建築の歴史を考えていく講義である。具体的には、地図やさまざまな史料を使いながら歴史的なまちの分析、あるいは住宅などの建物の実測調査と作図、模型の製作をおこなう。こうした作業を通じて、単に分析方法や実測の知識を身に付けるだけでなく、都市や建築の歴史的価値を見出し、その保存や再生がいかに創造的な行為であることを理解することが目的となる。

2020年度はコロナ禍の影響により、外出自粛令が長く出されていたので、「私の住むまちフィールドワーク」を設定した。自分の町は以前どのような構造を持っていたのかを地図で調べ、古地図を見ながら歩くことと改めているいろいろなことを発見できるはずである。さらに、インターネットで町や建物の古い写真を見つけると、より一層興味がわくはずだ。そうした限られた条件のなかで、魅力的な作品が多く集まった。その詳細はホームページをご覧ください。

(高村雅彦、高道昌志)

講義
「都市史」

江戸東京研究センターの研究を学生と共同で推進するために、東京のまちを対象に、街区、敷地、建築レベルで、江戸から明治、現代に沿ってその空間の変化を各時代の地図から考察する講義「都市史」を設けた。いま、歴史的な都市や建築の多様な対象にあって、現代都市との関係をいかに解読し再構築するかが求められている。本講義では、デザイン工学部建築学科の学部3年が主体となり、修士課程の大学院生がアドバイザーとなって、興味のある場所を自分たちで設定する。建築と都市の歴史の相互の関係を読み解く方法を身に付け、地図作業と実際のフィールドを方法として、その特質を表現する過程と技術を習得しながら、東京の新たな姿を創造するための基盤となる作業である。作品の詳細はホームページをご覧ください。

(高村雅彦)

EToS叢書

EToS叢書3「水都としての東京とヴェネツィア」

編著：江戸東京研究センター

監修：ローザ・カーロリ、小林ふみ子、陣内秀信、高村雅彦

出版社：法政大学出版局

発行年月：2022年1月25日

【序】

二つの水都を比較する意味（陣内秀信）

【イントロダクション】

江戸における水辺の文化（田中優子）

ヴェネツィアと海——コスモポリタンな商業都市（ドナテッラ・カラビ）

【第一部 場所の記憶、水の記憶】

地誌と絵本挿絵のなかの江戸（小林ふみ子）

都市の娯楽と記憶——『むだ砂子』考（マスキオ・パオラ）

水辺の記憶——神田川周辺の失われた水流空間の痕跡（ローザ・カーロリ）

視覚的記憶と水面——ヴェネツィアを見つめた写真家のまなざし（アンジェロ・マツジ）

【第二部 地図学と地理学における水都】

現代に継承された江戸東京の庭園——水系と地形の多様性が生み出すユニークさ（畠山望美）

絵地図における首都東京の風景表象——江戸から明治へ（米家志乃布）

【第三部 建築遺産と未来】

効果をあげないヴェネツィア保全のツール——その理由は？（ジョルジョ・ジャンギアン）

“地域の生態系”の維持や継承——東京の「銭湯」の例（栗生はるか）

ヴェネツィアと東京の比較研究の意義——歴史の継承と保存問題（マテオ・ダリオ・パオルッチ）

【第四部 水都をとりまく環境】

ヴェネツィア——水のテリトリー（フランコ・マンクーソ）

水に映しみる墨東の変貌（ポール・ウェイリー）

江戸東京の聖地から浮かび上がる都市と環境の領域（高村雅彦）

ラグーナのブドウ・オリーブ栽培——伝統とリキッド・モダニティ（フェデリカ・レティツィア・カヴァッロ／ダヴィデ・マストロヴィト）

【第五部 グローバル都市の住民——経済・文化・ガバナンス】

水都東京の再生プロセスと今後への展望（陣内秀信）

「大都市圏ヴェネツィア」に関する議論における水とウォーターフロント、もしくは欠けている論点（ステファノ・ソリアーニ／アレックス・カルザヴァーラ）

団地とタワーマンション：周縁と中心、内陸とウォーターフロント——東京圏の集住の起源と現況を概観する（渡辺真理／木下庸子）

【結び】

水都の再発見、回復、レジリエンス（ローザ・カーロリ）



EToS報告書

リーフレット「 commons を再生する東京」

編集者：北山恒

発行：江戸東京研究センター

発行年月：2021年3月

論考編

イントロダクション

【論考1】「紐上の都市エレメント」つくる commons の再生（北山恒）

【論考2】都市組織から見た東京の商店街（陣内秀信）

【論考3】都市を「線」で考える（大野秀敏）

【論考4】commons のマネジメント（織山和久）

【論考5】東京の都市組織を読む（渡辺真理）

実践編

イントロダクション

【実践1】路上空間の活用拠点：地域サロン「アイソメ」（栗生はるか）

【実践2】「紐」としての立地路地：食堂付きアパート（仲俊治・宇野悠里）

【実践3】紐状空間に作る新築の商店街：下北沢線路街BONUS TRACK（山道拓人・千葉元生・西川日満里）

【実践4】商店街を抱き込む生活圏（法政大学大学院・都市デザインスタジオ2020）



東京発掘プロジェクト水辺編III



監修：高村雅彦、皆川典久

発行：江戸東京研究センター

発行年月：2021年3月

報告書「都市の表象文化—アニメ・特撮における東京」

編集者：岡村民夫

発行：江戸東京研究センター

発行年月：2021年12月

講演記録：「アニメ・特撮における東京表象の意義」岡村民夫

講演記録：「特撮映画の東京—1950～60年代、東宝SF映画を中心に」安智史

講演記録：「ジブリアニメの武蔵野」赤坂憲雄

コメント：「アニメの東京表象と民俗学」山本真鳥

コメント：「自然と人間をダイナミックにとらえる」横山泰子

コメント：「東京のゴジラと江戸の妖怪」岩佐明彦



特別展図録

発行：江戸東京研究センター

発行年月：2021年9月

HOSEIミュージアム館長挨拶

江戸東京研究センター長挨拶

江戸東京研究センター（EToS）とは

は

EToS特別展について

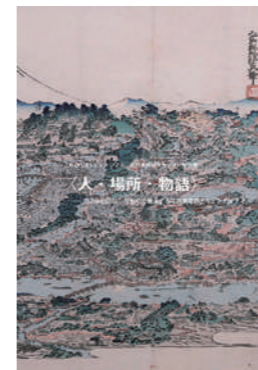
Site_A「〈水都〉江戸東京」

Site_B「水辺の営み・都市の記憶と物語」

Site_C「現代の東京に息づく江戸東京」

Site_D「commons を再生する東京2021」

あとがき



EToS協力

「東京人」2021年12月号特集「商店街に新風」

出版社：都市出版株式会社

発行年月：2021年12月

「commons 再生の最前線」北山恒

「深川資料館通り商店街」陣内秀信

「線状空地」山道拓人

「鼎談 新しい仕掛けをどうつづていくか」栗生はるか

「紐マップ」北山恒、山道拓人（制作指揮）



研究者著書

書名:『Bulletin286 2021 冬号』 著者名:栗生はるか(P.6-7寄稿) 標題:都市の記憶から創造する 発行:公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 発行年月:2020年12月	発行年月:2021年8月1日
書名:『景観用語事典増補改訂第二版』 著者名:篠原修編、福井恒明 発行:彰国社 発行年月:2021年2月	書名:『墨水四時雑詠』 著者名:停雲会(小林ふみ子・佐藤温・杉下元明・日原傳・堀口育男) 標題:田崎草雲隅田川図解説、夕陽楼主人序、生方鼎斎題辞、第11・17・23首注解 発行:太平書屋 発行年月:2021年9月
書名:『土地の記憶から読み解く早稲田』 著者名:ローザ・カーロリ 発行:勉誠出版 発行年月:2021年3月	書名:『地域をデザインする Vol.1』 著者名:陣内秀信(分担執筆) 日本建築美術工芸協会編 標題:豊かな生活空間、美しい景観を生み出すために 発行:建築画報社 発行年月:2021年10月
書名:『steam dreams-The Japanese public bath』 著者名:栗生はるか(P.14-18寄稿) 標題:the preservation of Sento, an urban communication hub 発行:国際交流基金 シドニー 発行年月:2021年3月	書名:『遊廓と日本人』 著者名:田中優子 出版社:講談社 発行年月:2021年10月
書名:『東アジアに共有される文学世界 東アジアの文学圏』 著者名:小峯和明(編) 小林ふみ子ら40名執筆 標題:東アジアの地図を読むー19世紀大坂商人の東アジア 発行:文学通信 発行年月:2021年3月	書名:建築ジャーナルNo.1323「銭湯のある風景」 著者名:栗生はるか(寄稿) 標題:銭湯とまちの関係性 発行:建築ジャーナル 発行年月:2021年11月1日
書名:『最後の文人 石川淳の世界』 著者名:田中優子 小林ふみ子 帆苅基生 山口俊雄 鈴木貞美 標題:「第2章 石川淳の〈江戸〉をどう見るか」 発行:集英社 発行年月:2021年4月	書名:『a+u』2021年11月臨時増刊号“Infraordinary Tokyo: The Right to the City” 著者名:栗生はるか(寄稿) 標題:地域の生態系を維持する銭湯 発行:新建築社 発行年月:2021年11月8日
書名:『近世蝦夷地の地域情報ー日本北方地図史再考』 著者名:米家志乃布 発行:法政大学出版局 発行年月:2021年5月	論文・学会発表・作品
書名:『都市のルネサンスーイタリア社会の底力』 著者名:陣内秀信 発行:古小烏舎 発行年月:2021年7月	査読付論文
書名:『禍いの日本大衆文化』 著者名:小松和彦、横山泰子 標題:第7章 岡本綺堂と疫病 発行:KADOKAWA 発行年月:2021年7月	論文標題:明治初期に始まる東京旧武家屋敷の牧場転用による都市空間の変容についてー飯田町・番町への牧場移転集中を例としてー 著者名:金谷匡高 雑誌名:日本建築学会計画系論文集 発行年月:2021年3月
書名:『住まいから問うシェアの未来:所有しえないもののシェアが、社会を変える』 著者名:岡部明子、鈴木亮平、山道拓人、猪熊純、前田昌弘、門脇耕三、小川さやか 発行:学芸出版	論文標題:近現代横浜・神戸における移民の多様性ーその類似点と相違点 著者名:大石高志・曾士才 雑誌名:社会経済史学Vol.87, No.2 発行年月:2021年8月
	論文標題:『蘇聯工人住宅区設計』の北京紡績第二工場に対する影響ー中国第一次五カ年計画期の労働者住宅地計画に関する研究 著者名:邵帥、高村雅彦 雑誌名:日本建築学会計画系論文集 第86巻 第787号、2378-2387 発行年月:2021年9月

論文	雑誌名:景観・デザイン研究講演集 17 発行年月:2021年12月
論文標題:桑木屋徳蔵の人物像 著者名:横山泰子 雑誌名:『小金井論集』15号 発行年月:2020年3月	論文標題:明治以降戦前の名所案内本にみる東京の神社に対する関心の変遷 著者名:志村遥奈、福井恒明 雑誌名:景観・デザイン研究講演集 17 発行年月:2021年12月
論文標題:サルデーニャで出会った水の聖地 著者名:陣内秀信 雑誌名:NICHE 07 (工学院大学建築学部) 発行年月:2020年12月	論文標題:千代田区を対象とした橋詰空間の変遷 著者名:藤田景、福井恒明 雑誌名:景観・デザイン研究講演集 17 発行年月:2021年12月
論文標題:戦前期東京都における史蹟の分布とその特徴 著者名:米家志乃布 雑誌名:法政大学地理学会70周年記念論文集 発行年月:2021年2月	論文標題:江戸・明治期の越後平野西部テリトリーオに関する研究 著者名:齋藤浩志郎、福井恒明 雑誌名:景観・デザイン研究講演集 17 発行年月:2021年12月
論文標題:水辺のソーシャルデザインとその未来 著者名:陣内秀信 雑誌名:河川 No.896 発行年月:2021年3月	論文標題:水害被災地における市街地拡大過程ー千曲市杭瀬下地区を対象にー 著者名:萩原隆太、福井恒明 雑誌名:景観・デザイン研究講演集 17 発行年月:2021年12月
論文標題:岩手とイーハトーブ 著者名:岡村民夫 雑誌名:『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報』 発行年月:2021年5月31日	論文標題:『名所江戸百景』に描かれた江戸の周縁領域 著者名:相澤航平、福井恒明 雑誌名:景観・デザイン研究講演集 17 発行年月:2021年12月
論文標題:『宮澤賢治 愁いの王』論 著者名:岡村民夫 雑誌名:賢治学+ 第1集 発行年月:2021年6月	学会発表(招待講演・国際学会)
論文標題:希望としての大学 著者名:田中優子 雑誌名:季刊教育法 209号 発行年月:2021年6月	発表標題:イタリアが生んだ都市とテリトリーオを読み解く方法の日本への応用 発表者名:陣内秀信 学会等名:異文化から何を学ぶか?/19・20世紀のイタリアと日本の交流から考える 発表場所:鹿児島大学(オンライン) 発表年月:2021年2月
論文標題:江戸時代に数学が盛んになった四つの理由 著者名:田中優子 雑誌名:現代思想 発行年月:2021年7月	発表標題:地中海地域と西アジアとの比較都市論ー空間人類学の視点から 発表者名:陣内秀信 学会等名:(科研究研究会) 都市文明の本質:古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 発表場所:オンライン 発表年月:2021年3月15日
論文標題:ポストコロナ時代の大学を考える 著者名:田中優子 雑誌名:大学時報 400号 発行年月:2021年9月	発表標題:文京区本郷における銭湯・旅館・喫茶店等での具体的な取り組みについて 発表者名:栗生はるか、三文字昌也 学会等名:デジタルアーカイブ学会 発表場所:オンライン 発表年月:2021年4月
論文標題:水害被災地における市街化の経緯と要因ー千曲市の農地転用に着目してー 著者名:渡邊真由、福井恒明 雑誌名:第64回土木計画学研究・講演集(CD-ROM) 発行年月:2021年12月	論文標題:最上川舟運と河川工学的特性の関係 著者名:堀越義人、福井恒明

発表標題:都市と人間―水辺のコスモロジー 発表者名:陣内秀信 学会等名:世界運河会議 発表場所:名古屋市中京テレビ・ホール 発表年月:2021年5月21日	発表者名:Shin Abiko 学会等名:Les concepts en traduction japonaise 発表場所:Paris Nanterre Universite 発表年月:2021年11月25日	対象著書(著者):『水都東京―地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』(筑摩書房、2020)(陣内秀信)	雑誌名:新建築 発表日:2021年2月号
発表標題:Reading the Urban Landscape of Tokyo: Topography and History 発表者名:Hidenobu Jinnai 学会等名:DOCOMOMO国際学生ワークショップ 発表場所:東京(オンライン) 発表年月:2021年7月28日	学会発表 発表標題:江戸川乱歩邸の空間変遷と暮らし―江戸川乱歩邸の実測調査報告 その1― 発表者名:石樽督和、金谷匡高、砂川晴彦 学会等名:日本建築学会近畿支部研究発表会 発表場所:オンライン 発表年月:2021年6月	評者名:佐藤信 媒体名:読売新聞 書評掲載年月:2021年7月25日 対象著書(著者):『近世蝦夷地の地域情報』(米家志乃布)	作品名:銭湯山車 著者名:文京建築会ユース+銭湯山車巡行部(栗生はるか、三文字昌也、内海皓平、村田勇氣) 賞・媒体名:国際芸術祭「東京ビエンナーレ2020/2021」出展作品 掲載媒体:東京新聞 他” 発表日:2021年7月
発表標題:An antiquarian society: Interest in ‘ordinary’ old artefacts as a complement to traditional court scholarship 発表者名:Fumiko Kobayashi 学会等名:16th International Conference of the European Association for Japanese Studies 発表場所:Online (hosted in Ghent) 発表年月:2021年8月	発表標題:江戸川乱歩が構想・増築した洋館・玄関廻りについて―江戸川乱歩邸の実測調査報告 その2― 発表者名:金谷匡高、石樽督和、砂川晴彦 学会等名:日本建築学会近畿支部研究発表会 発表場所:オンライン 発表年月:2021年6月	評者名:齋藤忠光 媒体名:日本地図学会『地図』59-2 書評掲載年月:2021年8月 対象著書(著者):『近世蝦夷地の地域情報』(米家志乃布)	作品名:奈良井宿 古民家群活用プロジェクト 設計者名:ツバメアーキテクツ(上原屋) 雑誌名:新建築 発表日:2021年12月
発表標題:近代期の東京における搾乳業と都市空間 発表者名:金谷匡高 学会等名:東アジア都市史学会 発表場所:オンライン 発表年月:2021年9月	著作について書かれた書評 評者名:時田紗緒里 媒体名:国文目白(60) 書評掲載年月:2021年2月 対象著書(著者):『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』(法政大学江戸東京センター・小林ふみ子・中丸宣明(編)、文学通信、2020年6月)	評者名:後藤和子 媒体名:文化経済学 第18巻2号 書評掲載年月:2021年9月 対象著書(著者):『水都東京―地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』(陣内秀信)	その他 対談:インフォーマルな場のづくり方 話者:祐成保志(東京大学)、山道拓人・千葉元生・西川日満里(ツバメアーキテクツ) 雑誌名:新建築 発表日:2021年2月号
発表標題:テリトリーオの営みが生んだ景観―その再評価と継承の方法― 発表者名:陣内秀信 学会等名:飯田市地域史研究集会 発表場所:オンライン 発表年月:2021年9月11日	評者名:大井実 媒体名:西日本新聞 書評掲載年月:2021年9月11日 対象著書(著者):『都市のルネサンス―イタリア社会の底力』(陣内秀信)	評者名:松田法子 媒体名:都市史研究 8 書評掲載年月:2021年10月 対象著書(著者):『水都東京―地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』(陣内秀信)	標題:パブリックトイレをまちに繋げる仕掛け:パブリックトイレのあり方を考える 話者:山道拓人、小泉秀樹(東京大学)、中川エリカ(建築家) 雑誌名:新建築 発表日:2021年4月号
発表標題:Japanese Architects ‘Devising of Healthy Housing in Manchuria 発表者名:BAO Muping, TAKAMURA Masahiko 学会等名:4th Internationl Conference of the East-Asian Society for Urban History 発表場所:オンライン 発表年月:2021年9月11日	評者名:構大樹 媒体名:週間読書人 書評掲載年月:2021年4月2日 対象著書(著者):『宮沢賢治論 心象の大地へ』(岡村民夫)	評者名:藤村龍至 媒体名:週刊読書人 書評掲載年月:2021年10月29日 対象著書(著者):『都市のルネサンス―イタリア社会の底力』(陣内秀信)	標題:北斎が生きた江戸時代 著者名:田中優子 雑誌名:AERAムック 発行年月:2021年7月
発表標題:Learning from architecture 発表者名:栗生はるか 他多数 学会等名:日本建築学会建築文化事業委員会 発表場所:オンライン 発表年月:2021年10月	評者名:村上祐紀 媒体名:日本近代文学104号 書評掲載年月:2021年5月 対象著書(著者):『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』(法政大学江戸東京センター・小林ふみ子・中丸宣明(編)、文学通信、2020年6月)	評者名:小野有五 媒体名:(財)地図情報センター『地図情報』159 書評掲載年月:2021年11月 対象著書(著者):『近世蝦夷地の地域情報』(米家志乃布)	標題:シンポジウム「つながる喜び:江戸のリモート・コミュニケーション」報告 著者名:神楽岡 幼子、グラムリヒ=オカ ベティーナ、辻村 尚子、菱岡 憲司、神作 研一、小林 ふみ子 雑誌名:『近世文芸』114号 発行年月:2021年7月
発表標題:Nuove tendenze nella ricerca sulla storia urbana in Giappone 発表者名:Hidenobu Jinnai 学会等名:Aisu International 発表場所:オンライン 発表年月:2021年11月20日	評者名:吉田文憲 媒体名:現代詩手帖 書評掲載年月:2021年6月 対象著書(著者):『宮沢賢治論 心象の大地へ』(岡村民夫)	作品 作品名:押上のビル PLAT295 設計者名:ツバメアーキテクツ 雑誌名:新建築 発表日:2021年2月号	標題:江戸の夏 著者名:田中優子 雑誌名:サライ 発行年月:2021年8月
発表標題:Philosophie	評者名:佐藤信 媒体名:読売新聞 書評掲載年月:2020年12月6日	作品名:リノア北赤羽 設計者名:ツバメアーキテクツ	標題:明治の寄席芸人・解説 著者名:田中優子 書名:『明治の寄席芸人』(岩波文庫) 発行年月:2021年8月

2021年度事業報告 著書・論文・その他

標題:「北海道江差一北前船の終着地」

著者名:米家志乃布

雑誌名:『地図情報』41-2

発行年月:2021年8月1日

標題:水都・江戸東京のグリーンインフラ

著者名:神谷 博

雑誌名:国づくりと研修 vol.146

発行年月:2021年10月30日

標題:なぜ今銭湯か 銭湯が持つ多様な価値とまちとのつながり(鼎談)

著者名:(鼎談)江口晋太郎、栗生はるか、サム・ホールデン、牧野 徹

雑誌名:建築ジャーナルNo.1323「銭湯のある風景」

発行年月:2021年11月

標題:新しい仕掛けをどうつくっていくか

著者名:(鼎談)小野裕之、栗生はるか、中川寛子

雑誌名:東京人2021年12月号 特集「商店街に新風」

発行年月:2021年11月

書評

評者名:栗生はるか

雑誌名:コンフォルト179号

発表年月:2021年6月

対象書籍:写真集『東京銭湯』

評者名:米家志乃布

雑誌名:『都市史研究』8「新刊紹介」

発表年月:2021年8月

対象書籍:安孫子信監修/江戸東京研究センター編『風土(Fudo)から江戸

東京へ』法政大学出版局

評者名:岡村民夫

雑誌名:『図書新聞』

発表年月:2021年10月9日

対象書籍:岡本紀子『立原道造 風景の建築』大阪大学出版会

*2021年4月現在
五十音順

江戸東京研究センター長				研究推進室専門研究員、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
高村 雅彦(タカムラ マサヒコ)	教授	デザイン工学部建築学科	稲益 祐太(イナマス ユウタ)	久留米工業大学特任講師、法政大学デザイン工学部兼任講師、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
研究プロジェクト・リーダー			犬塚 悠(イヌツカ ユウ)	名古屋工業大学大学院工学研究科准教授
水都一基層構造			CAROLI Rosa(カーロリ ローザ)	ヴェネツィア カ・フォスカリ大学言語学・比較文化研究学科教授
高村 雅彦(タカムラ マサヒコ)	教授	デザイン工学部建築学科	香月 歩(カツキ アユミ)	東京工業大学助教
江戸東京の「ユニーク」さ			金谷 匡高(カナヤ マサタカ)	世田谷区教育委員会学芸員
小林 ふみ子(コバヤシ フミコ)	教授	文学部日本文学科	神谷 博(カミヤ ヒロシ)	特定非営利活動法人雨水まちづくりサポート理事長、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
テクノロジーとアート			川添 裕(カワゾエ ユウ)	横浜国立大学名誉教授
岡村 民夫(オカムラ タミオ)	教授	国際文化学部 国際文化学科	川田 順造(カワダ ジュンゾウ)	神奈川大学特別招聘教授
都市東京の近未来			北山 恒(キタヤマ コウ)	architecture WORKSHOP 主宰、横浜国立大学名誉教授
山道 拓人(サンドウ タクト)	講師	デザイン工学部建築学科	栗生 はるか(クリユウ ハルカ)	一般社団法人せんとうとまち代表理事、法政大学デザイン工学部兼任講師
江戸東京アトラス			河野 哲也(コウノ テツヤ)	立教大学文学部教育学科教授
福井 恒明(フクイ ツネアキ)	教授	デザイン工学部都市環境デザイン工学科	齋藤 智志(サイトウ シトシ)	秋山庄太郎写真美術館 主任学芸員
			佐竹 雄太(サタケ ユウタ)	創造系不動産株式会社マネージャー、建築家住宅手帖編集長
特任研究員			白石 さや(シライシ サヤ)	東京大学名誉教授(東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター協力研究員)
陣内 秀信(ジンナイ ヒデノブ)	特任教授	法政大学名誉教授	鈴村 裕輔(スズムラ ユウスケ)	名城大学外国語学部准教授
田中 優子(タナカ ユウコ)	特任教授	法政大学名誉教授	高道 昌志(タカミチ マサシ)	東京都立大学助教、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
兼任研究員			星野 勉(ホシノ ツトム)	法政大学名誉教授、国際日本学研究所客員所員
赤松 佳珠子(アカマツ カズコ)	教授	デザイン工学部建築学科	眞島 望(マシマ ノゾム)	成城大学文芸学部非常勤講師
安孫子 信(アヒコ シン)	教授	文学部哲学科	皆川 典久(ミナガワ ノリヒサ)	東京スリバチ学会会長、鹿島建設株式会社
岩佐 明彦(イワサ アキヒコ)	教授	デザイン工学部建築学科	森田 喬(モリタ タカシ)	法政大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
大塚 紀弘(オオツカ ノリヒロ)	准教授	文学部史学科	森中 康彰(モリナカ ヤスアキ)	一級建築士事務所 小坂森中建築 代表
小口 雅史(オグチ マサシ)	教授	文学部史学科	山本 真鳥(ヤマモト マトリ)	法政大学名誉教授
川久保 俊(カクボ シュン)	教授	デザイン工学部建築学科	渡邊 眞理(ワタナベ マコト)	法政大学名誉教授
衣笠 正晃(キヌガサ マサアキ)	教授	国際文化学部国際文化学科		
米家 志乃布(コメイエ シノブ)	教授	文学部地理学科		
下吹越 武人(シモヒゴシ タケト)	教授	デザイン工学部建築学科		
曾 士才(ソウ シサイ)	教授	国際文化学部国際文化学科		
高見 公雄(タカミ キミオ)	教授	デザイン工学部都市環境デザイン工学科	リサーチ・アシスタント(R・A)	
出口 清孝(デグチ キヨタカ)	教授	デザイン工学部建築学科	邵 帥(ショウ スイ)	法政大学デザイン工学研究科建築学専攻博士後期課程
中丸 宣明(ナカマル ノブアキ)	教授	文学部日本文学科	内藤 啓太(ナイトウ ケイタ)	法政大学デザイン工学研究科建築学専攻博士後期課程
根崎 光男(ネサキ ミツオ)	教授	人間環境学部人間環境学科	畠山 望美(ハタケヤマ ノゾミ)	法政大学デザイン工学研究科建築学専攻博士後期課程
松本 剣志郎(マツモト ケンシロウ)	准教授	文学部史学科	肥田川 裕生(ヒルカワ ユウキ)	法政大学人文科学研究科史学専攻修士課程修了
横山 泰子(ヨコヤマ ヤスコ)	教授	理工学部創生科学科	余 鵬正(ヨ ホウセイ)	法政大学デザイン工学研究科建築学専攻後期課程
客員研究員			羅 莎(ラ サ)	法政大学人文科学研究科史学専攻博士後期課程 満期退学
石神 隆(イシガミ タカシ)	法政大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員			
石渡 雄士(イシワタ ユウシ)	国立研究開発法人建築研究所戦略的			



法政大学 江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for Edo-Tokyo Studies
https://edotokyo.hosei.ac.jp
問い合わせ先:法政大学 江戸東京研究センター事務局
E-mail edotokyo-jimu@ml.hosei.ac.jp TEL 03-3264-9682

発行: 2022年3月31日